

平成30年度実施

福祉に関する意識・実態調査報告書

—小・中学生、高校生、特別支援学校高等部生、保護者、特別支援学校保護者—

[クロス集計版]

社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会

福祉教育研究委員会

「福祉に関する意識・実態調査」報告書 [クロス集計版] の刊行にあたって

鳥取県の福祉教育・学習、特に学校で行われる取組みは、長年にわたる実践の蓄積のう
えで展開されています。1973年度に米子市社会福祉協議会が「福祉教育モデル指定事
業」を開始し、1977年度には鳥取県社会福祉協議会が「福祉の教育研究協力校」の指
定を始めます。次第に、「福祉教育」は教育行政でも注目されることとなり、1989年
度からは、県教育委員会の学校教育の努力点に位置付けられました。以来、県内の小・中
学校、高等学校の全校で、福祉教育＝「福祉の心を育む教育」が実践されてきました。

「福祉の心を育む教育」は、幼い頃から家庭・学校・地域などあらゆる生活の場で、人
間尊重の精神を基盤に、ともに幸福を求めて生きる学びの場を通して培われるものです。
その育成においては、幼稚園・保育所・認定こども園・学校での「福祉教育」の展開に加
え、社会福祉協議会・公民館・社会福祉施設をはじめとした各種の機関や団体などでの「福
祉学習」を推進することで、地域社会全体の課題として立体的に取り組んできました。

また、2002年から学習指導要領に基づく「総合的な学習の時間」の内容に「福祉」
が盛り込まれてから、児童・生徒が地域社会の中で、様々な人との「ふれあい」や体験、
ボランティア活動等に関わること広がっていきました。

社会福祉をめぐるも、社会福祉基礎構造改革を起点に、介護保険制度の開始、障がい
者の権利保障と自立支援に関わる諸施策の展開、子ども・子育て支援新制度の施行など、
従来の福祉制度やその背景にある福祉観などが大きく変貌しています。

このような中で、私たちは、児童・生徒、保護者や教員等が、「福祉」に関してどのよ
うな考え方や意識をもっているか、過去4回実施した同様の調査と比較対照しながら、県
内の福祉教育・学習実践の積上げの成果及び今後の推進上の課題を把握する調査を、赤い
羽根共同募金の助成金を受けて平成30年度に実施しました。データを集計後、単純集計
版としての報告書を、平成31年3月にまとめたところです。

この度は、特に重要と思われる質問間のクロス集計を行い、その結果をこの報告書にま
とめています。家庭での役割行動や福祉・ボランティア活動の経験が、福祉的な行動や交
流、福祉を学ぶ意欲などとの相関性を見出そうというねらいです。その結果から特徴的な
傾向を見出し、今後の更なる福祉教育・学習の推進に向けた取組方針を検討していきたい
と考えています。

改めて、平成30年度調査の実施にあたり、関係の皆さまへ厚く感謝を申し上げる次第
であります。特に、調査に御回答くださった各学校の教員、児童・生徒、保護者の皆様方
の御理解と御協力に対して、心から感謝と御礼を申し上げます。

願わくは、この報告書が福祉教育に携わる方々、県民の皆さまに御活用いただき、鳥取県
の福祉教育・学習が、鳥取県の福祉が、さらにいっそう進展することを祈るものであります。

令和2（2020）年3月
鳥取県社会福祉協議会
福祉教育研究委員会

目 次

報告書の刊行にあたって

研究の目的・趣旨	1
調査の概要	4
<小・中学生の部> クロス集計と解説 前回調査との比較	11
<高校生の部> クロス集計と解説 前回調査との比較	22
<特別支援学校高等部生の部> クロス集計と解説 高校生との比較	29
<保護者の部> クロス集計と解説 前回調査との比較	36
<特別支援学校保護者の部> クロス集計と解説 保護者との比較	43
調査結果（クロス集計）の特徴点と今後の課題	52
福祉教育研究委員会委員名簿	55

研究の目的・趣旨

1 鳥取県における福祉教育の沿革

(1) 学校における「福祉教育」

日本における福祉教育の歴史は古く、終戦直後に、人間性の回復をめざし、子どもたちに社会福祉をとおした教育をという趣旨から始まった。その後、昭和52年に国庫補助事業「学童・生徒のボランティア活動普及事業」が始まり、学校における本格的な取り組みが全国各地で展開されるようになった。

鳥取県においては、昭和28年の八頭郡社会福祉協議会による「社会福祉事業普及校設置事業」を先駆けに、昭和48年の米子市「福祉教育モデル指定事業」以降、境港市、東伯町、倉吉市でも福祉教育の取り組みが始まっている。

昭和52年からは、鳥取県社会福祉協議会（以下、県社協）が、「福祉の教育研究協力校」の指定を始め、その後、県内の市町村社会福祉協議会（以下、市町村社協）へ急速にして事業が拡大、昭和55年からは、高等学校の指定も始まり、市町村社協では幼稚園、保育所、特別支援学校へと取り組みが広がっていった。

このような取り組みのなか、福祉教育は教育委員会でも注目されることとなり、平成元年からは鳥取県教育委員会の学校教育の努力点に位置付けられ、その後、平成14年に学習指導要領が改訂（高等学校は平成15年度）され、新たに創設された「総合的な学習の時間」の内容に「福祉」が盛り込まれたことから、ボランティア活動を含む豊かな社会体験、自然体験

活動を、学校教育・社会教育をとおして、学校・家庭・地域が連携して取り組むことが推進されてきた。

福祉教育事業の学校指定は、県社協と市町村社協の実施を含めて、昭和52年からの学校指定の累計は、小・中学校、高等学校で100%となっている。現在、市町村社協は継続しており、平成30年度は17市町村社協で幼稚園・保育所・認定こども園（10所）、小学校（73校）、中学校（38校）、高等学校（8校）、特別支援学校（4校）、義務教育学校（1校）の実施となっている。

なお、県社協はこの事業を平成25年度で終了しているが、高等学校を対象とした特別指定校事業は平成9年度から現在にわたり取り組んでおり延べ8校を指定している。

(2) 地域における「福祉教育」

県社協は、昭和60年から「ボランティア体験事業」を始め、それまで学校を中心に取組まれてきた福祉教育から、県内の高等学校に通う高校生以上を対象に「ボランティア体験月間（7～8月）」の夏休み期間を中心に社会福祉施設で活動するプログラムへと領域を拡大した。また、市町村社協の自主事業として、主に小・中学生を対象としたプログラムが用意され、平成30年度は、324プログラムに1,049人の参加があった。

加えて、県社協では、近年、いじめや虐待など子どもたちを取り巻く環境の変化や住民同士の間関係の希薄化が問題視され、地域のなかで社会性を育て“とも

に生きる”ことを考える「地域を基盤とした福祉教育」の取組みに関心が高まったことを受け、平成16～27年度にかけて「福祉学習サポーター講座」を実施し、延べ385人のサポーターを養成してきた。また、平成26～28年度は「福祉学習推進ファシリテーター養成講座」、平成29年度からは「福祉学習推進者スキルアップ講座」を実施するなど、地域の福祉・生活課題にふれ福祉の理解を広げる活動を行うとともに、福祉教育・学習の支援者（協力者）の学びを促進している。

また、市町村社協を対象に、平成15年度から「地域で取り組む福祉教育・ボランティア活動推進事業」を延べ21社協が指定事業を受け、地域を基盤とした体験・学習活動の展開を進めている。

（3）指導者等に向けた取組み

昭和52年から実施している「福祉の教育研究協力校事業」とともに「福祉教育実践校研究協議会」を開催し、昭和61年からは「福祉教育研究セミナー」として、社協、学校、福祉施設、民生委員・児童委員、福祉協力員など福祉教育関係者を中心に福祉教育の推進に向け、関係者の共通理解、共同実践の基盤を提供することを目的に開催している。

また、平成16～20年度にかけて、福祉学習を授業に取入れる際の展開例や演習・グループワークの具体的なヒントをまとめ、学びがよりいっそう豊かなものとなるよう福祉教育読本「ともに生きる」（小学生向け、中学生向け、先生向け）を発行した。さらには、「福祉の心」を育

む実践が地域住民を対象とした取組みへと広がるよう平成23～25年度にかけて、ガイドブック「福祉で輝く地域づくり」「福祉で取り組む福祉学習実践ヒント集」「福祉で取り組む福祉学習実践事例集」を発行した。また、高校生向けに、鳥取県にゆかりのある福祉の先人やその考え方、県内で熱心な福祉に関わる取組みの紹介をまとめ、一人ひとりが日常生活のなかで地域の福祉の問題の解決に向けた実践力が高まることを願い、平成27～29年度にかけて福祉教育読本「ともに生きる」シリーズ『福祉の理念編』『福祉の理解編』『福祉の実践編』の3部作を発行した。これらの読本は、学校の授業や地域の福祉学習の場面等で活用いただいている。

2 調査の位置づけ

（1）今回調査のねらい

県社協では、昭和56年、平成2年、平成12年、平成20年に同様の調査を実施している。

昭和56年は「福祉の心を育てる教育」を推進するための指針となる『実践の手引き』を編纂しており、この一環として児童・生徒の福祉への関心や理解度を把握し、また、小・中学生、高校生が日常生活の中でどのように過ごし、感じているかを調査した。この年は、国際障害者年でもあり、この面からも福祉への関心が高まっていた時期でもある。

平成2年は、時代の変遷のもとで児童・生徒等の変化を探るとともに、保護者を対象に加え、家庭への福祉教育への影響

も検討することとなった。この年も、前年末に高齢者保健福祉十か年戦略が打ち出され、老人福祉関係八法改正が行われた年であった。

平成12年は、介護保険制度導入直後の調査となり、障がいのある生徒とその保護者を調査対象に加え、ノーマライゼーションを実現する観点から福祉教育の位置づけを検討する資料として調査を実施している。

平成20年は、「障害者自立支援法」が平成18年に施行や、平成19年度に起こった年金記録問題など社会福祉に関する国民の関心が高まっているもとの実施となった。

今回調査は、日本が平成26年に批准した「障害者権利条約」、平成28年「障害者差別解消法」施行をはじめ、鳥取県においても平成21年「あいサポート運動」スタート、平成25年「鳥取県手話言語条例」制定、平成29年「あいサポート条例」施行など障がい福祉分野を取り巻く施策が広がっているもとの実施となった。また、平成28年閣議決定「ニッポン一億総活躍プラン」に地域共生社会の実現が盛り込まれ、平成30年「改正社会福祉法」施行で地域福祉推進の基盤強化が進められるなど、地域課題に住民が主体的に関わる動きが高まっているなかでの実施となった。

今回対象とした児童・生徒は、特別支援学校変更した以外は、前回同様の学校としている。平成23年以降実施の学習指導要領で「生きる力」の育成の実現や、

平成32年から実施の新学習指導要領への移行期間の世代にあたる。過去の調査結果を踏まえた時代の変遷を見ながら、福祉教育の実践の検証と、県社協が平成20年度策定「鳥取県における今後の福祉教育推進体制イメージ」に基づいて進めている地域を基盤とした取組みの成果を探り、今後の更なる事業展開を考察する資料として調査を実施した。

調査の概要

1 調査目的

児童・生徒および教員ならびに保護者の社会福祉に関する考え方などをうかがい、平成20年度に実施した同様の調査結果との比較対照を中心に、県内の福祉教育・学習の取り組みの傾向を把握するとともに、地域を基盤とした実践の成果を探り、今後の更なる事業展開を考察する。

2 調査項目

小・中学生の部

- ① 基本的属性
- ② 生活の満足度
- ③ 家庭における仕事の分担
- ④ 高齢者との関わり
- ⑤ 障がい者とのかかわり
- ⑥ 社会福祉
- ⑦ 福祉に関する関心と理解
- ⑧ 募金活動とボランティア活動
- ⑨ 将来の生き方

高校生の部

- ① 基本的属性
- ② 福祉のイメージ
- ③ 募金活動
- ④ 高齢者との関わり
- ⑤ 障がい者とのかかわり
- ⑥ 差別問題
- ⑦ 環境・資源保護
- ⑧ ボランティア活動
- ⑨ 社会福祉の情報源と知識
- ⑩ 将来の生き方

特別支援学校（高等部生）の部

- ① 基本的属性
- ② 福祉のイメージ
- ③ 募金活動
- ④ 高齢者との関わり
- ⑤ 他の高校生とのかかわり
- ⑥ 差別問題
- ⑦ 環境・資源保護
- ⑧ ボランティア活動
- ⑨ 社会福祉の情報源と知識
- ⑩ 将来の生き方

保護者の部

- ① 基本的属性
- ② 福祉のイメージ
- ③ 高齢者との関わり
- ④ 障がい者とのかかわり
- ⑤ 社会道徳
- ⑥ 差別問題
- ⑦ 環境・資源保護
- ⑧ ボランティア活動
- ⑨ 福祉教育への関心
- ⑩ 子どものしつけ
- ⑪ 社会福祉の情報源と知識
- ⑫ 子どもの将来への願い

特別支援学校（高等部）保護者の部

- ① 基本的属性
- ② 福祉のイメージ
- ③ 高齢者との関わり
- ④ 地域の人や子どもとのかかわり
- ⑤ 社会道徳
- ⑥ 差別問題
- ⑦ 環境・資源保護
- ⑧ ボランティア活動
- ⑨ 福祉教育への関心
- ⑩ 子どものしつけ
- ⑪ 社会福祉の情報源と知識
- ⑫ 子どもの将来への願い

教員の部

- ① 基本的属性
- ② 福祉のイメージ
- ③ ボランティア活動
- ④ 福祉の教育
- ⑤ 社会福祉の情報源

小・中学生、高校生、特別支援学校生（高等部生）および教員、保護者、特別支援学校（高等部生）の保護者に関しては、前回調査をベースにアンケート項目を作成する。

小・中学生には、同一の調査票を用い、その成長段階の推移をみる。高校生、特別支援学校生（高等部生）、保護者、特別支援学校（高等部生）の保護者、教員には別種の調査票を作成し、6種類の調査相互に関連をもたせ、比較検討できるように配慮する。

いずれの場合にも、各質問間の単純集計とともに、特に重要と思われる質問間のクロス集計も行う。

【クロス集計】

◆小・中学生の部

問3 「あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。」の結果と、以下の項目との関連をみた。

問1 「あなたは、今の学校生活に満足していますか。」

問2 「あなたは、今の家庭生活を楽しんでいると感じていますか。」

問7 「あなたが、満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗ってきました。あなたはちょっと体が疲れていました。そんな時あなたならどんな行動をしますか。」

問11 「公園に行った時に、紙くずが落ちていました。その時、あなたならどうしますか。」

問12 「あなたは、公園の花だんに植えてある花を近所の子どもが勝手にとっているのを見かけました。そんな時、あなたならどうしますか。」

◆高校生の部

問13 「あなたは、『ボランティア活動』をしたことがありますか。」の結果と、以下の項目との関連をみた。

問2 「あなたは、『赤い羽根共同募金』『緑の募金』、障がい児（者）や交通遺児のためなどの募金に協力したことがありますか。」

問5 「あなたは、あなたの親が祖父母と同居することについてどう考えますか。」

問9 「あなたは、障がいのある生徒と一緒に学校生活をするということについて、どのように感じますか。」

問10 「あなたは、身近に差別を感じたり、見聞きしたことがありますか。」

問16「あなたは、学校で福祉について、もっと知る機会があればよいと思いますか。」

問18「あなたは、将来どのような生き方をしたいと思いますか。」

問19「あなたが、これから就職を考える場合、就職先として、社会福祉施設（保育所、障がい児施設、児童養護施設、老人ホームなど）や在宅福祉（ホームヘルプサービス）などの福祉の仕事を対象のひとつとして考えることができますか。」

◆特別支援学校高等部生の部

問13「あなたは、『ボランティア活動』をしたことがありますか。」の結果と、以下の項目との関連をみた。

問2「あなたは、『赤い羽根共同募金』『緑の募金』、障がい児（者）や交通遺児のためなどの募金に協力したことがありますか。」

問5「あなたは、あなたの親が祖父母と同居することについてどう考えますか。」

問9「あなたは他の高校たちと一緒に学校生活をするということについて、どのように感じますか。」

問10「あなたは、身近に差別を感じたり、見聞きしたことがありますか。」

問16「あなたは、学校で福祉について、もっと知る機会があればよいと思いますか。」

問18「あなたは、将来どのような生き方をしたいと思いますか。」

問19「あなたが、これから就職を考える場合、就職先として、社会福祉施設（保育所、障がい児施設、児童養護施設、老人ホームなど）や在宅福祉（ホームヘルプサービス）などの福祉の仕事を対象のひとつとして考えることができますか。」

◆保護者（小・中学校、高校）の部

問11「あなたは、『福祉活動』や『ボランティア活動』をしたことがありますか。」の結果と、以下の項目との関連をみた。

問7「あなたは、あなたの子どもが障がいのある生徒と一緒に学校生活をするということについてどのように感じますか。」

問8「あなたが満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗ってきました。あなたはちょっと体が疲れていました。そんな時あなたなはどんな行動をしますか。」

問12「あなたは、学校教育の中で『福祉教育・学習』を実践することについてどうお考えになりますか。」

問14「あなたは、よその子どもに注意したり、ほめたりできますか。」

問15「あなたは子どもに家族の一員として、何かお手伝いをさせていますか。」

問18「あなたは、子どもに将来どのような生き方をしてほしいと思いますか。」

◆特別支援学校（高等部）保護者の部

問11「あなたは、『福祉活動』や『ボランティア活動』をしたことがありますか。」
の結果と、以下の項目との関連をみた。

問7「あなたは、あなたの子どもが他の高校生たちと一緒に学校生活をするこ
についてどのように感じますか。」

問8「あなたが満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗っ
てきました。あなたはちょっと体が疲れていました。そんな時あなたなはどんな行動を
しますか。」

問12「あなたは、学校教育の中で『福祉教育・学習』を実践することについ
てどうお考えになりますか。」

問14「あなたは、よその子どもに注意したり、ほめたりできますか。」

問15「あなたは子どもに家族の一員として、何かお手伝いをさせていますか。」

問18「あなたは、子どもに将来どのような生き方をしてほしいと思いますか。」

3 調査対象および標本抽出法

【小学生】

県内の小学校の中から、東部、中部、西部および郡部・市部を配慮し、計24校を
抽出し、各学校とも6学年1学級を対象とする。また、前回との比較のため前回と同
一の学校とする。

【中学生】

小学生と同様の方法で、前回の対象校と同一の16校を抽出し、各学校とも2学年
1学級とする。

【高校生】

小・中学生の場合と同様の方法に加えて、公立・私立、普通科、専門学科を配慮し
て前回と同一の10校を抽出し、各学校とも2年生1学級とする。

【特別支援学校（高等部生）】

特別支援学校（高等部）2年生とする。

【保護者】

小・中学校、高等学校とも、調査対象校の各対象児童・生徒の保護者1名とする。

【特別支援学校（高等部生）の保護者】

調査対象校の各対象高等部生の保護者1名とする。

【教員】

調査対象校の教員で、小学校はその第6学年、中・高等学校は第2学年の学級担任全員（正副担任のある場合は正担任のみ）と学年主任を対象とする。

特別支援学校（高等部）については、その保護者が対象となっている学校の教員を対象とする。

4 調査時期

平成30年10月中旬～平成31年1月中旬

5 調査方法

小・中学生、高校生、特別支援学校生は担任による集合調査方法。

保護者、教員は託送および郵送による配票調査法。

6 調査票回収状況

区 分	配布数	回収数	回収率
小学生	5 5 0	5 2 0	9 4 . 5 %
中学生	4 7 2	4 4 6	9 4 . 5 %
高校生	3 5 5	3 4 5	9 7 . 2 %
特別支援学校高等部生	3 3	3 3	1 0 0 . 0 %
保護者	1, 3 7 7	5 8 1	4 2 . 2 %
(小学生)	5 5 0	2 2 5	4 0 . 9 %
(中学生)	4 7 2	2 4 1	5 3 . 2 %
(高校生)	3 5 5	1 0 5	2 9 . 6 %
特別支援学校保護者	1 8 9	6 5	3 4 . 4 %
教員	2 5 9	2 1 4	8 2 . 6 %
(小学生)	7 0	4 6	6 5 . 7 %
(中学生)	7 5	7 4	9 8 . 7 %
(高校生)	7 4	7 0	9 4 . 6 %
(特別支援学校)	4 0	2 4	6 0 . 0 %
合 計	3, 2 3 5	2, 2 0 4	6 8 . 1 %

7 調査協力校

鳥取市立稲葉山小学校	鳥取市立東中学校
鳥取市立美保小学校	鳥取市立西中学校
鳥取市立明德小学校	鳥取市立湖東中学校
鳥取市立湖山小学校	鳥取市立千代南中学校
鳥取市立青谷小学校	鳥取市立青谷中学校
米子市立就将小学校	米子市立福生中学校
米子市立住吉小学校	米子市立加茂中学校
米子市立尚徳小学校	米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校
米子市立彦名小学校	倉吉市立久米中学校
倉吉市立西郷小学校	倉吉市立河北中学校
倉吉市立明倫小学校	倉吉市立鴨川中学校
境港市立外江小学校	境港市立第二中学校
境港市立境小学校	岩美町立岩美中学校
岩美町立岩美北小学校	湯梨浜町立北浜中学校
八頭町立郡家東小学校	大山町立大山中学校
八頭町立八東小学校	江府町立江府中学校
若桜町立若桜学園小学校	
智頭町立智頭小学校	鳥取県立鳥取東高等学校
湯梨浜町立羽合小学校	鳥取県立鳥取湖陵高等学校
琴浦町立聖郷小学校	鳥取県立青谷高等学校
南部町立西伯小学校	鳥取県立倉吉東高等学校
伯耆町立溝口小学校	鳥取県立倉吉総合産業高等学校
大山町立大山小学校	鳥取県立米子東高等学校
日野町立根雨小学校	鳥取県立米子南高等学校
	鳥取県立境港総合技術高等学校
鳥取県立琴の浦高等特別支援学校	私立鳥取城北高等学校
鳥取県立倉吉養護学校	私立米子松蔭高等学校
鳥取県立皆生養護学校	

《小・中学生の部》

クロス集計と解説
前回調査との比較

《小・中学生の部》

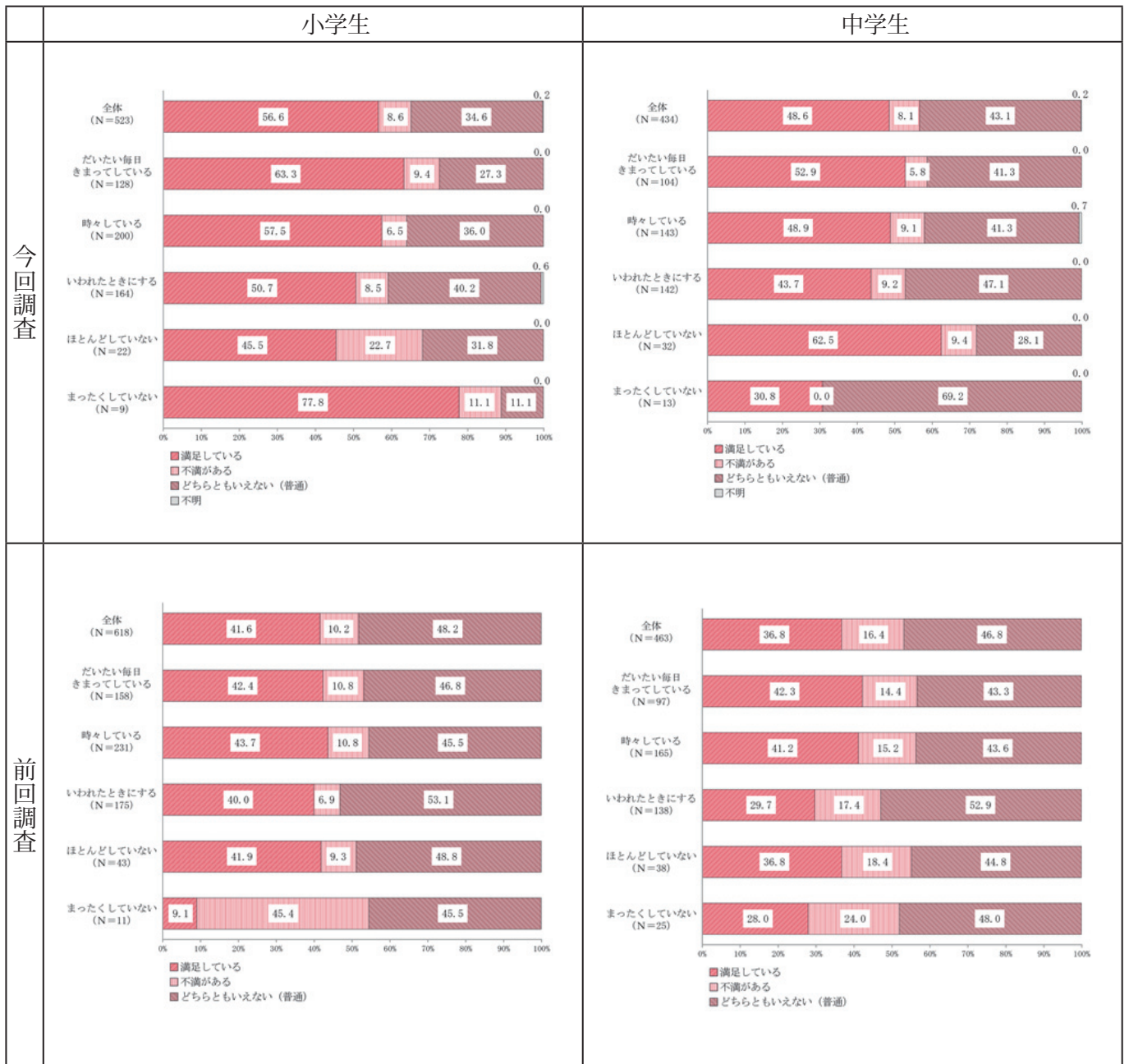
〈問3 と問1 のクロス集計〉

■問3 あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。

- 1. だいたい毎日きまっています
- 2. 時々している
- 3. いわれたときにする
- 4. ほとんどしていない
- 5. まったくしていない

■問1 あなたは、今の学校生活に満足していますか。

- 1. 満足している
- 2. 不満がある
- 3. どちらともいえない (普通)



調査項目の内、問3の「家事分担・お手伝い」の結果と、他の項目との関連をみた。なお、問3への回答について、「1. だいたい毎日きまっしてしている」を選択した者を「毎日」グループ、「2. 時々している」を「時々①」グループ、「3. いわれたときにする」を「時々②」グループ、「4. ほとんどしていない」を「しない①」グループ、「5. まったくしていない」を「しない②」グループと以降略記する。

【小学生】	「毎日」から「しない①」グループになるにつれて「満足している」と回答した割合は少ない。「しない①」グループは過半数を割っている。「しない②」グループは「満足している」と回答した割合が77%を占めて最大となっている。「しない②」グループは「不満である」と回答した割合が22%あった。
【中学生】	「毎日」から「時々」グループになるにつれて「満足している」と回答した割合は少ない。「時々①」「時々②」は過半数を割っている。また、「しない②」グループは「満足している」と回答した割合が30%と最少となっている。「しない①」グループで「満足している」と回答した割合が62%を占め最大となっている。

前回調査との比較

【小学生】	全体では学校生活に「満足している」が15ポイント多い。「満足している」が著しく多くなっているのは「毎日」グループが54ポイント、「しない②」グループが35ポイント多くなっている。
【中学生】	全体では学校生活に「満足している」が11ポイント多い。「満足している」が著しく多くなっているのは「しない①」グループで25ポイント多くなっている。
【全 体】	小・中学生ともに「満足している」が多くなっている。「不満がある」と回答した割合が多くなったのは小学生「時々②」「しない①」「しない②」グループとなっている。

〈問3と問2のクロス集計〉

■問3 あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。

1. だいたい毎日きまっています
2. 時々している
3. いわれたときにする
4. ほとんどしていない
5. まったくしていない

■問2 あなたは、今の家庭生活を楽しんでいると感じていますか。

1. 楽しい
2. 楽しくない
3. どちらともいえない (普通)



【小学生】	「家事分担・お手伝い」の結果にかかわらず家庭生活を「楽しい」と回答する割合が過半数を超えている。
【中学生】	「家事分担・お手伝い」の結果にかかわらず家庭生活を「楽しい」と回答する割合が過半数を超えている。

前回調査との比較

【小学生】	全体では家庭生活を「楽しい」が1ポイント多い。「しない②」グループは「楽しい」が35ポイント多い。「毎日」グループは「楽しい」が1ポイント少ない。
【中学生】	全体では家庭生活を「楽しい」が3ポイント多い。「しない①」グループは39ポイント多い。どのグループも家庭生活を「楽しくない」と回答する割合が少ない。
【全 体】	小・中学生ともに家庭生活を「楽しい」が過半数を超えているが、小学生では68%に対して、中学生では57%となっており、11ポイントの開きが生じている。この差は前回と同じ傾向となっている。

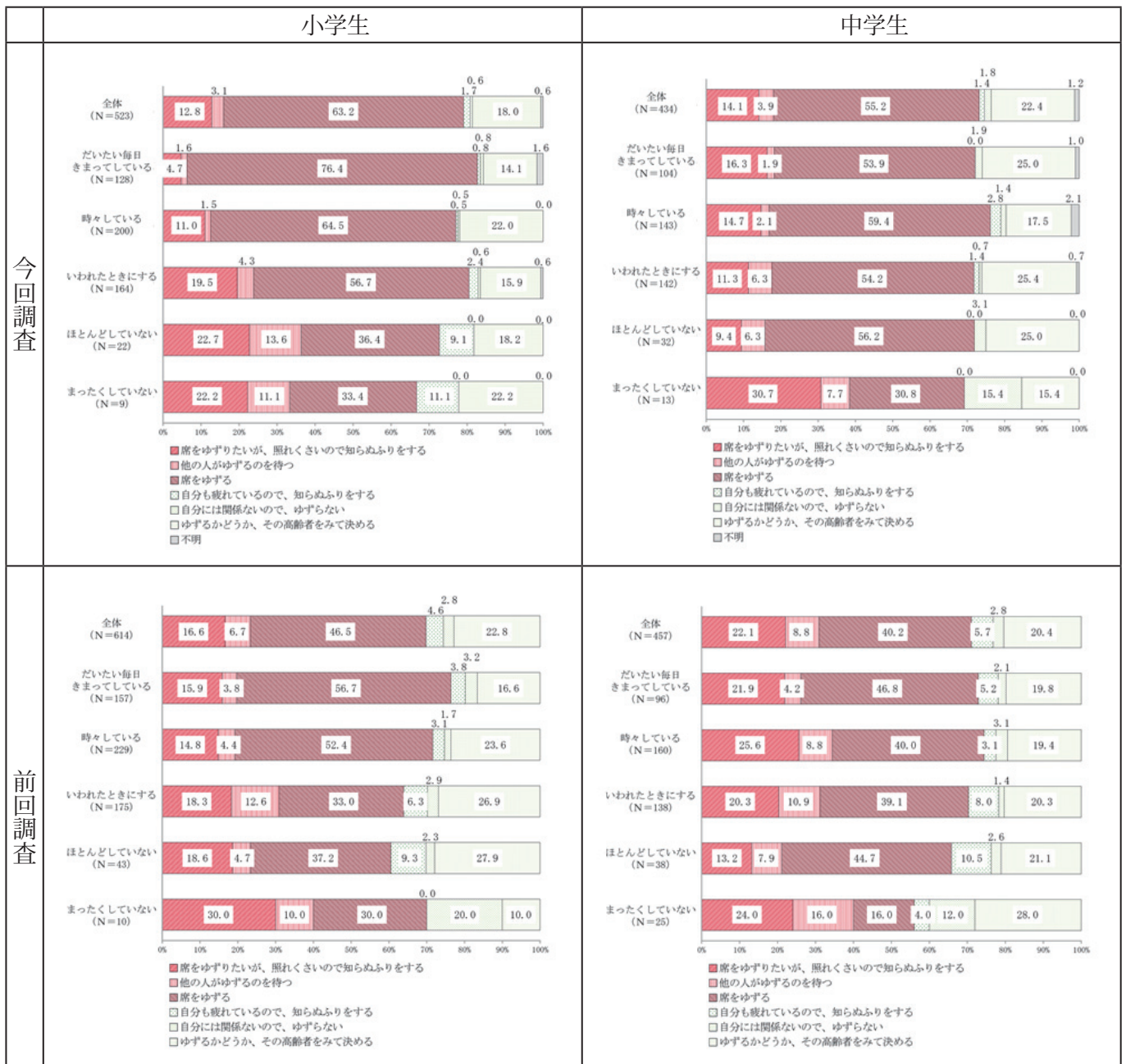
〈問3と問7のクロス集計〉

■問3 あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。

1. だいたい毎日きまっています
2. 時々している
3. いわれたときにする
4. ほとんどしていない
5. まったくしていない

■問7 あなたが、満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗ってきました。あなたはちょっと体が疲れていました。そんな時あなたならどんな行動をしますか。

1. 席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする
2. 他の人がゆずるのを待つ
3. 席をゆずる
4. 自分も疲れているので、知らぬふりをする
5. 自分には関係ないので、ゆずらない
6. ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める



【小学生】	「毎日」から「しない②」グループで「席をゆずる」と回答した割合は「毎日」グループの76%を最大に、少なくなっており「しない①」グループ36%、「しない②」グループ33%と過半数を割っている。
【中学生】	全体として「席をゆずる」と回答した割合は過半数を超えているが、「しない②」グループだけが30%である。

前回調査との比較

【小学生】	全体では「席をゆずる」が16ポイント多い。一方で、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が4ポイント少なく、「席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする」が3ポイント少ない。「しない②」グループは、「自分には関係ないので、ゆずらない」が8ポイント少ない。「しない①」グループは、「他の人がゆずるのを待つ」が8ポイント多い。
【中学生】	全体では「席をゆずる」が15ポイント、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が2ポイント多い。「しない①」グループは、「席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする」が9ポイント多く、「自分も疲れているので、知らぬふりをする」が10ポイント少ない。「しない②」グループは、「他の人がゆずるのを待つ」が8ポイント、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が12ポイント少ない。
【全 体】	小・中学生ともに「自分には関係ないので、ゆずらない」「知らぬふりをする」が減少の傾向となっている。

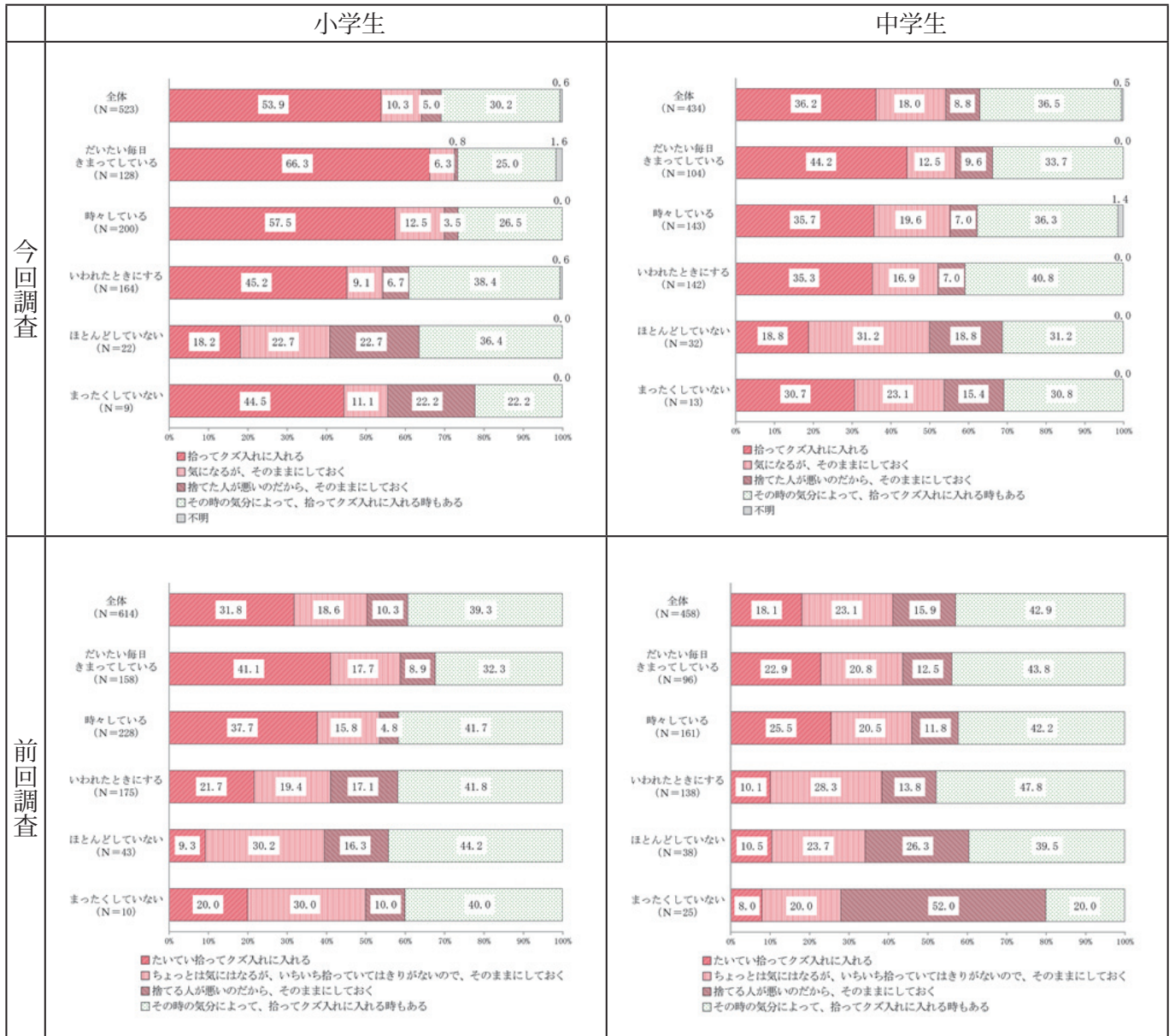
〈問3と問11のクロス集計〉

■問3 あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。

1. だいたい毎日きまっています
2. 時々している
3. いわれたときにする
4. ほとんどしていない
5. まったくしていない

■問11 公園に行った時に、紙くずが落ちていました。その時、あなたならどうしますか。

1. 拾ってクズ入れに入れる
2. 気になるが、そのままにしておく
3. 捨てた人が悪いのだから、そのままにしておく
4. その時の気分によって、拾ってクズ入れに入れる時もある



【小学生】	「拾ってクズ入れに入れる」と回答した者は「している」「時々①」「時々②」グループは45%以上となっている。「しない②」グループも「拾ってクズ入れに入れる」が44%となっている。「気になるが、そのままにしておく」「捨てた人が悪いのだから、そのままにしておく」は、「毎日」から「しない②」グループになるにつれて、割合が多くなる傾向がみられる。
【中学生】	「拾ってクズ入れに入れる」と回答した者は「している」「時々①」「時々②」グループは35%以上となっている。「しない②」グループも「拾ってクズ入れに入れる」が30%となっている。

前回調査との比較

【小学生】	家族の一員として何か家の仕事を分担してお手伝いをしている・していないにかかわらず「拾ってクズ入れに入れる」割合が多い。全体では「拾ってクズ入れに入れる」が22ポイント多い。どのグループも「拾ってクズ入れに入れる」が多くなっている。一方で、「気になるが、そのままにしておく」が8ポイント少ない。「捨てた人が悪いのだから、そのままにしておく」が5ポイント、「その時の気分によって、拾ってクズ入れに入れる時もある」が9ポイント少ない。
【中学生】	家族の一員として何か家の仕事を分担してお手伝いをしている・していないにかかわらず「拾ってクズ入れに入れる」割合が増えている。「しない①」「しない②」グループでは、「気になるが、そのままにしておく」が多くなっている。全体では「拾ってクズ入れに入れる」が18ポイント多い。一方で、「気になるが、そのままにしておく」が5ポイント少ない。どのグループも「捨てた人が悪いのだから、そのままにしておく」が少なくなっている。特に「しない②」グループは36ポイント少ない。
【全 体】	小・中学生ともに「毎日」から「しない①」グループの「拾ってクズ入れに入れる」と回答した割合は「毎日」グループの小学生66%、中学生44%を最大に少なくなっている。「しない②」グループの「拾ってクズ入れに入れる」と回答した割合は小学生44%、中学生30%で、「しない①」グループの小学生18%、中学生18%を上回っている。

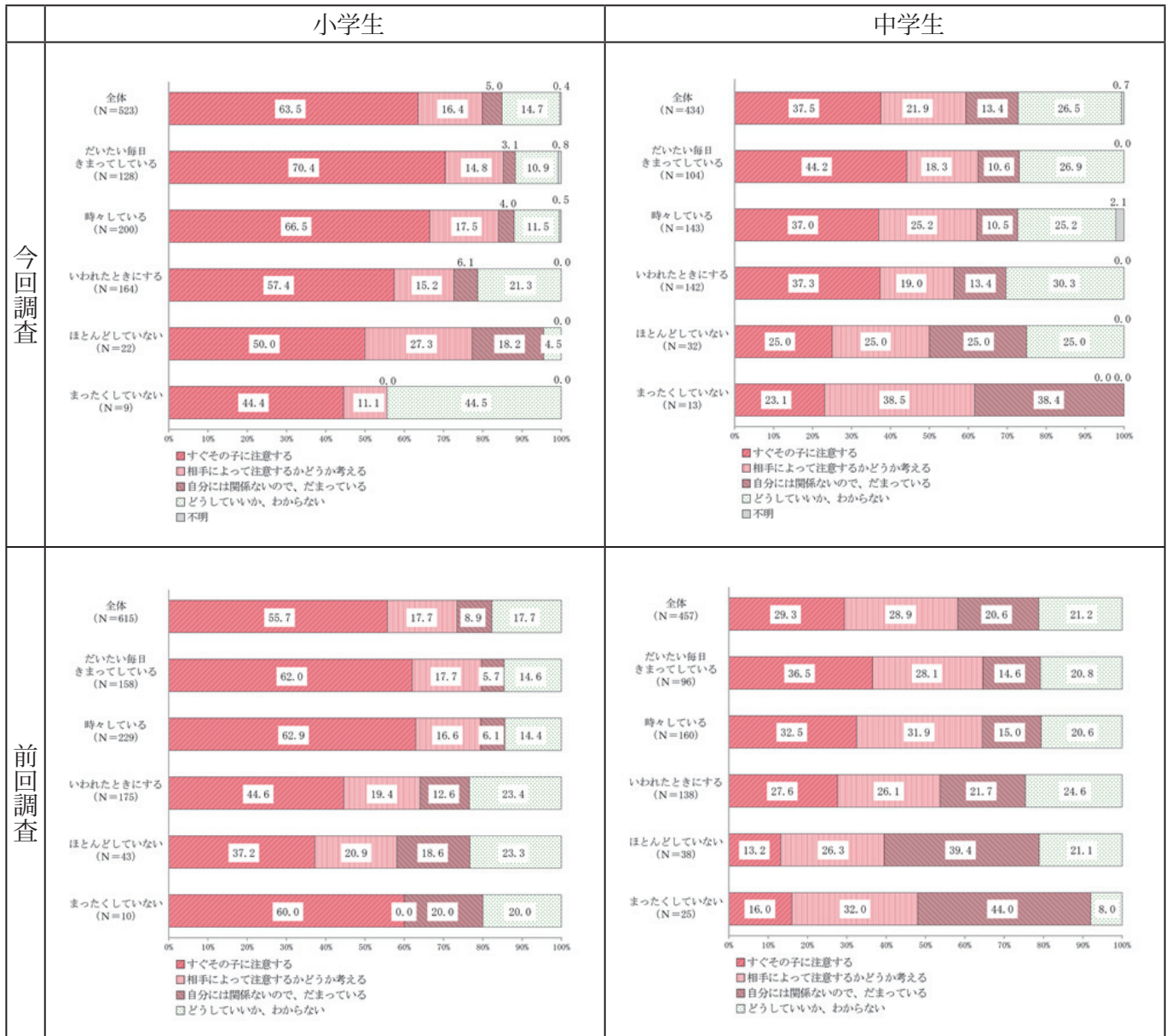
〈問3 と問12 のクロス集計〉

■問3 あなたは、家族の一員として何か家の仕事を分担して、お手伝いしていますか。

- 1. だいたい毎日きまっています
- 2. 時々している
- 3. いわれたときにする
- 4. ほとんどしていない
- 5. まったくしていない

■問12 あなたは、公園の花だんに植えてある花を近所の子どもが勝手にとっているのを見かけました。そんな時、あなたならどうしますか。

- 1. すぐその子に注意する
- 2. 相手によって注意するかどうか考える
- 3. 自分には関係ないので、だまっている
- 4. どうしていいか、わからない



【小学生】	「すぐその子に注意する」と回答した者は「している」グループが70%と最大で、「しない②」グループは44%であり、全体では63%となっている。「自分には関係ないので、だまっている」と回答した者は全体で5%であるのに対して、「しない②」グループは回答した者はいない。
【中学生】	「毎日」から「しない②」グループになるにつれて、「すぐその子に注意する」の割合が少なくなり、「相手によって注意するかどうか考える」と「自分には関係ないので、だまっている」の割合が多くなっている。

前回調査との比較

【小学生】	全体では「すぐその子に注意する」が7ポイント多い。一方で、「相手によって注意するかどうか考える」「自分には関係ないので、だまっている」「どうしていいか、わからない」が少なくなっている。「しない②」グループは「すぐその子に注意する」が15ポイント少ない。
【中学生】	全体では「すぐその子に注意する」が8ポイント多い。一方で、「相手によって注意するかどうか考える」「自分には関係ないので、だまっている」「どうしていいか、わからない」が少なくなっている。「すぐその子に注意する」が「しない①」グループが11ポイント多い。「相手によって注意するかどうか考える」が「しない②」グループのみが多くなっている。
【全 体】	小・中学生ともに「すぐその子に注意する」の割合が増加しているが、小学生では63%に対して、中学生では37%となっており、26ポイントの開きが生じている。小・中学生ともに「相手によって注意するかどうか考える」「自分には関係ないので、だまっている」「どうしていいか、わからない」の割合は減少の傾向がみられるが、中学生は「どうしていいか、わからない」が増加の傾向がうかがえる。

《高校生の部》

クロス集計と解説
前回調査との比較

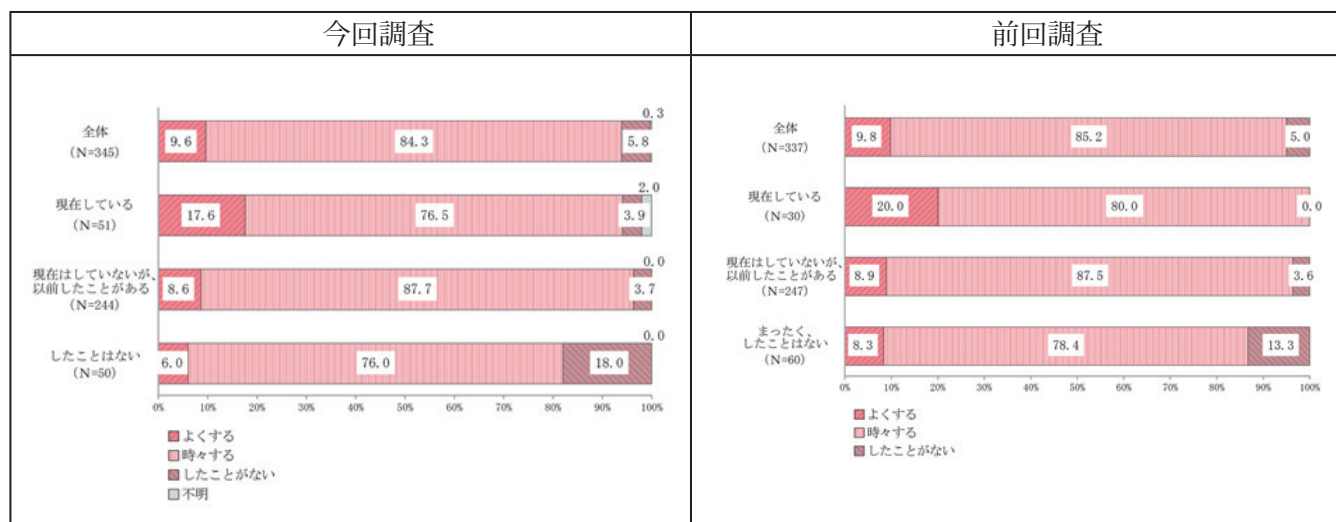
〈問13と問2のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問2 あなたは、「赤い羽根共同募金」「緑の募金」、障がい児（者）や交通遺児のためなどの募金に協力したことがありますか。

1. よくする 2. 時々する 3. したことがない



調査項目の内、問13の「ボランティア活動の経験の有無」の結果と、他の項目との関連をみた。なお、問13への回答について、「1現在している」を選択した者を「している」グループ、「2現在はしていないが、以前したことがある」を「以前」グループ、「したことはない」を「しない」グループと以降略記する。

「している」から「しない」グループになるにつれて、募金への協力を「よくする」の割合が減少していく傾向がみられる。募金への協力を「時々する」はどのグループも76%以上となっている。

前回調査との比較

全体では比較増減の差はほとんど変わらない。「している」グループでは、前はなかった募金への協力を「したことがない」が3ポイント多い。

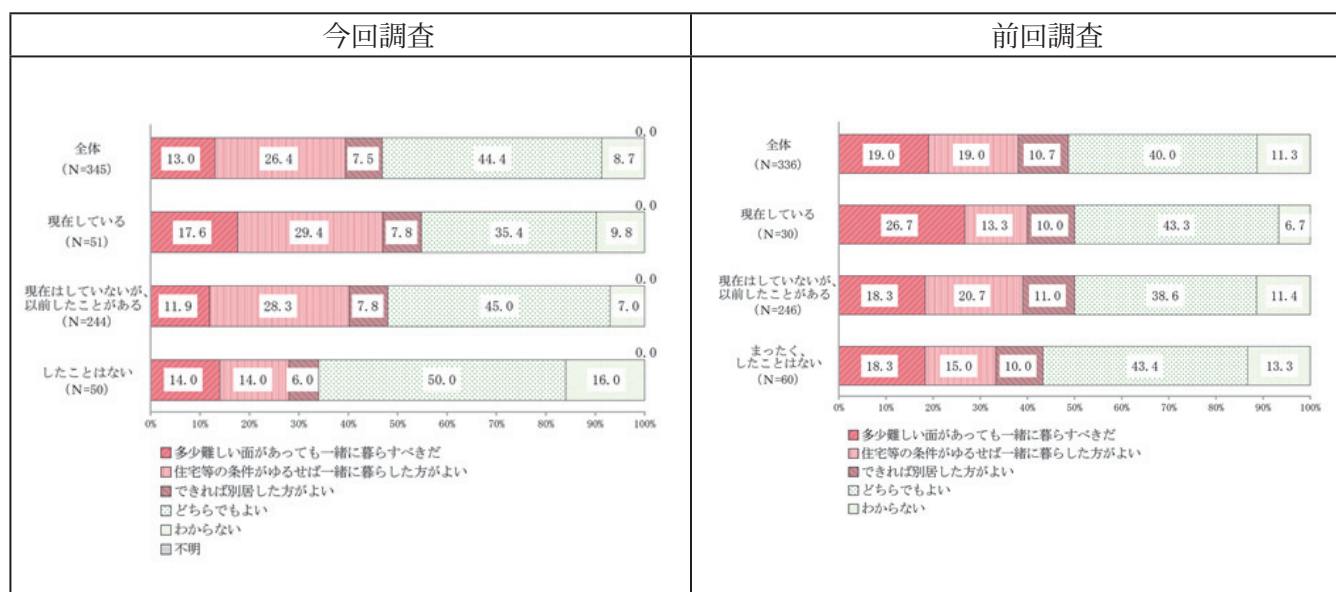
〈問13と問5のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問5 あなたは、あなたの親が祖父母と同居することについてどう考えますか。

1. 多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ 2. 住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい
3. できれば別居した方がよい 4. どちらでもよい 5. わからない



「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」という同居を肯定する回答の割合が、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて少ない。一方で、「どちらでもよい」と回答する割合は多い。また、「できれば別居した方がよい」はすべてのグループで7%台までとなっている。

前回調査との比較

全体では「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」が6ポイント少ない。一方で、「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」が7ポイント多い。また、「できれば別居した方がよい」が3ポイント少ない。「しない」グループは「どちらでもよい」が6ポイント多く50%となっている。

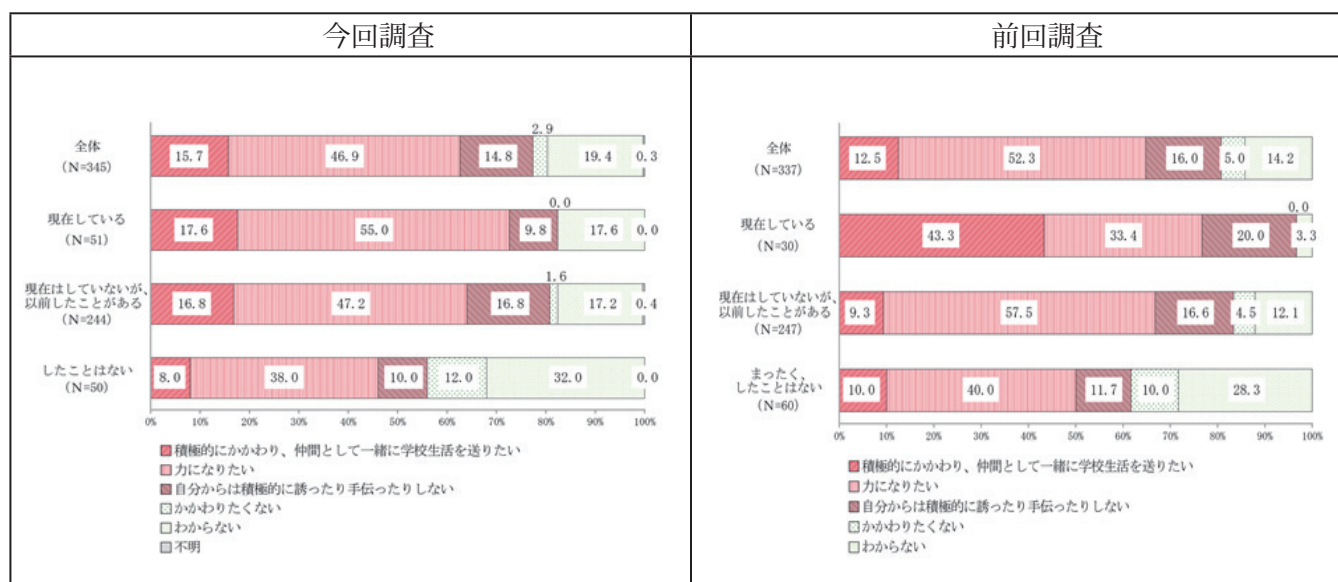
〈問13と問9のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問9 あなたは、障がいのある生徒と一緒に学校生活をする事について、どのように感じますか。

1. 積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい 2. 力になりたい
3. 自分からは積極的に誘ったり手伝ったりしない 4. かかわりたくない 5. わからない



「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい」と「力になりたい」をあわせた障がいのある生徒とのかかわりに肯定的な回答をした者は、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて減少しており前回と同様の傾向がうかがえる。一方で、「かかわりたくない」については、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて徐々に増加しており、「しない」グループが障がいのある生徒とのかかわりに消極的な傾向は前回と同様である。

前回調査との比較

全体では「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい」が3ポイント多い。「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい」と「力になりたい」をあわせた肯定的な回答は2ポイント少ない。「している」グループは「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい」の回答が前回は40%を超えていたが25ポイント少なく20%を割っている。「以前」グループは「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送りたい」の回答が7ポイント多い。

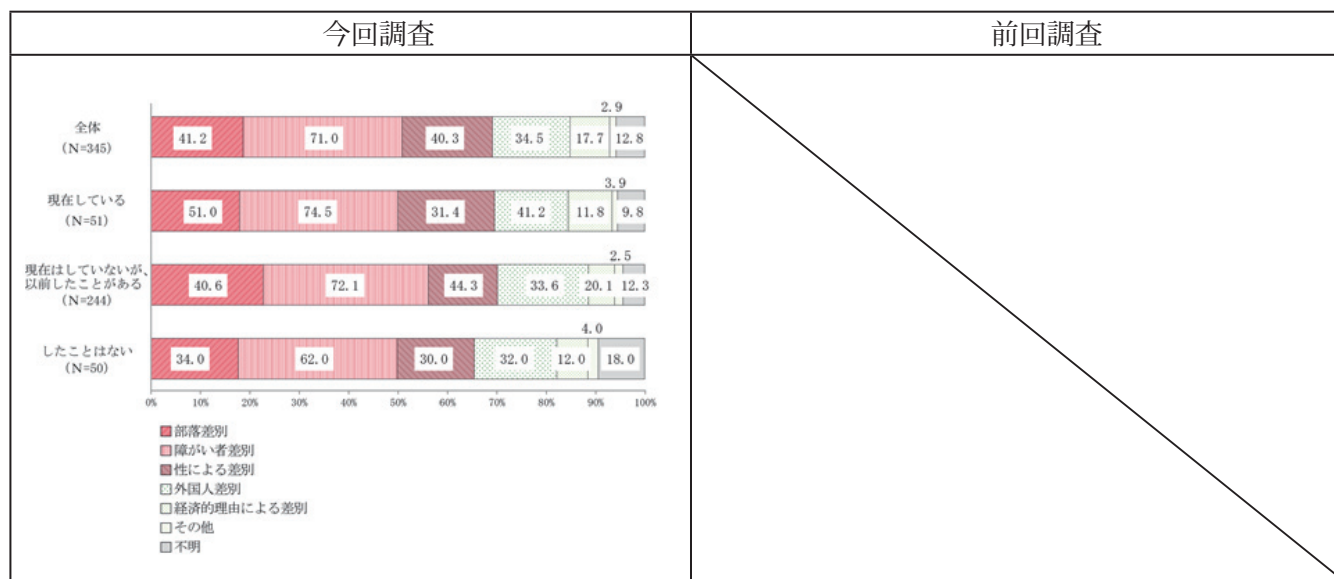
〈問 13 と問 10 のクロス集計〉

■問 13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 10 あなたは、身近に差別を感じたり、見聞きしたことがありますか。該当するものをすべて選んでください。(複数回答)

1. 部落差別 2. 障がい者差別 3. 性による差別
4. 外国人差別 5. 経済的理由による差別 6. その他



※複数回答のため、合計が 100%にならない。

「部落差別」「障がい者差別」「外国人差別」は「しない」から「以前」「している」グループになるにつれて、身近に差別を感じたり見聞きする回答が増加する傾向がうかがえる。すべてのグループは「障がい者差別」を身近に感じたり見聞きする回答する者の割合が過半数を超えている。

前回調査との比較

前回調査はクロス集計をしていないため比較なし。

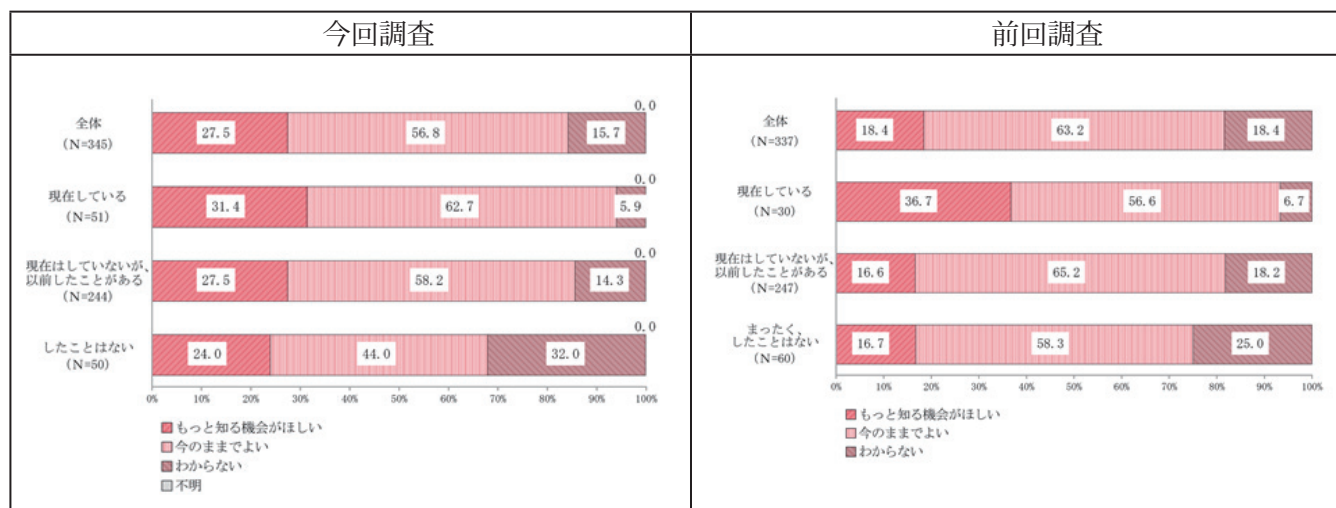
〈問13と問16のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問16 あなたは、学校で福祉について、もっと知る機会があればよいと思いますか。

1. もっと知る機会がほしい 2. 今のままでよい 3. わからない



「今のままでよい」と回答する者の割合は「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて減少の傾向がうかがえる。また、「わからない」と回答した者が、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて増加しており、「している」と「しない」グループでは26ポイントの開きが生じている。

前回調査との比較

「している」グループで「もっと知る機会がほしい」と回答した者の割合が5ポイント少ないものの、「以前」グループで10ポイント、「しない」グループで7ポイント多い。全体では「もっと知る機会がほしい」が9ポイント多い。

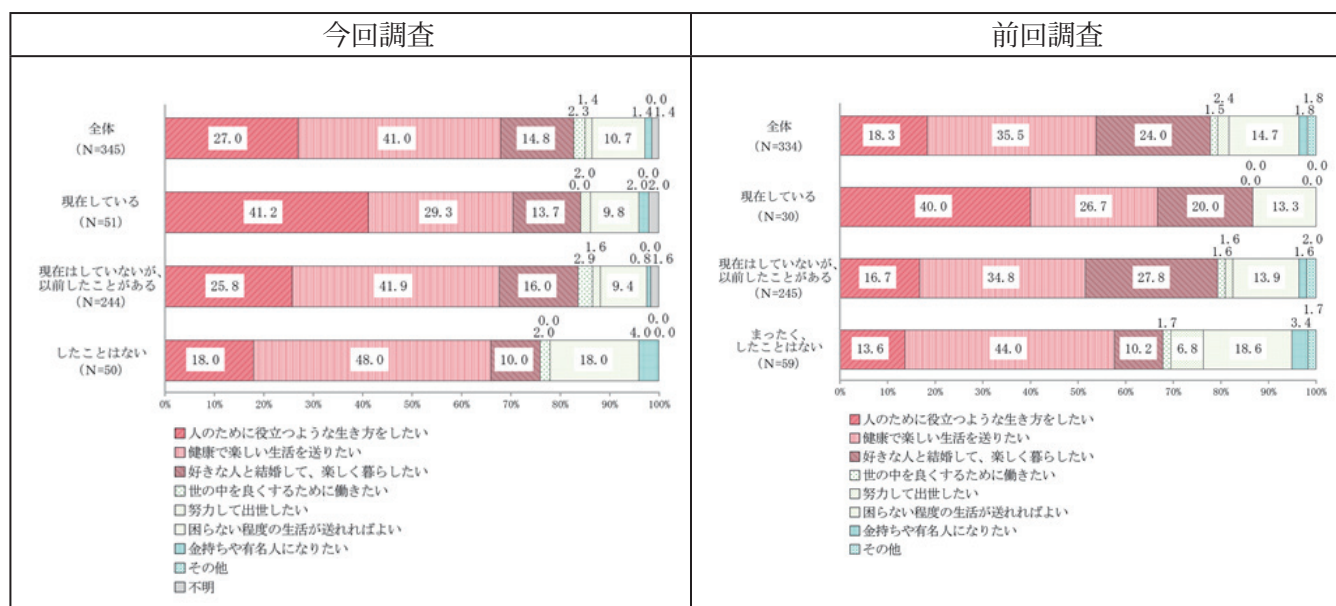
〈問13と問18のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問18 あなたは、将来どのような生き方をしたいと思いますか。次の項目の中から、あなたの考え方にいちばん近いものを選んでください。

1. 人のために役立つような生き方をしたい 2. 健康で楽しい生活を送りたい
 3. 好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい 4. 世の中を良くするために働きたい
 5. 努力して出世したい 6. 困らない程度の生活が送ればよい
 7. 金持ちや有名人になりたい 8. その他



全体では「健康で楽しい生活を送りたい」が40%となっている。「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて、増加の傾向がうかがえる。また、「人のために役立つような生き方をしたい」と回答した者は「している」グループで40%を占めており、「以前」「しない」グループになるにつれて減少の傾向がうかがえる。

前回調査との比較

全体では「人のために役立つような生き方をしたい」が8ポイント多い。どものグループも「人のために役立つような生き方をしたい」「健康で楽しい生活を送りたい」の割合が多い。また、「好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい」がどのグループも割合が低く、「以前」グループは11ポイント少ない。

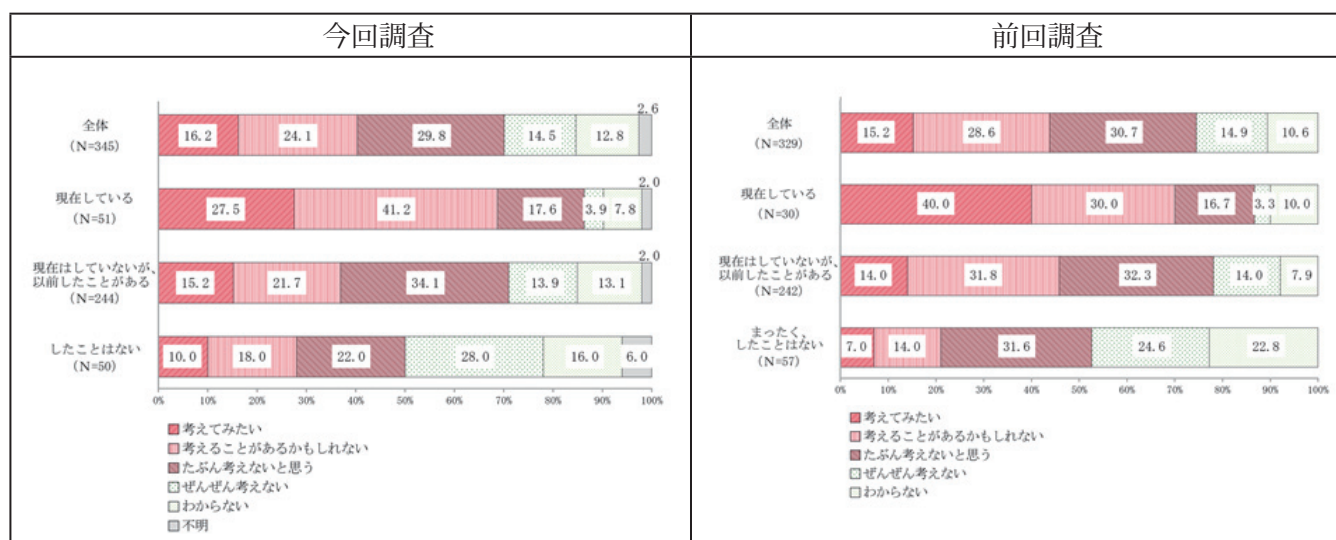
〈問13と問19のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問19 あなたが、これから就職を考える場合、就職先として、社会福祉施設（保育所、障がい児施設、児童養護施設、老人ホームなど）や在宅福祉（ホームヘルプサービス）などの福祉の仕事を対象のひとつとして考えることができますか。

1. 考えてみたい 2. 考えることがあるかもしれない 3. たぶん考えないと思う
4. ぜんぜん考えない 5. わからない



全体の割合は前回と変わらない傾向がみられる。「考えてみたい」「考えることがあるかも知れない」と回答した割合は、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて減少の傾向がうかがえる。一方で、「ぜんぜん考えない」は、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて増加している傾向がうかがえる。

前回調査との比較

全体では「考えてみたい」が1ポイント多い。「している」グループでは「考えてみたい」と回答した者の割合が前回は40%を占めていたが、今回は30%を割っている。

《特別支援学校高等部生の部》

クロス集計と解説
高校生との比較

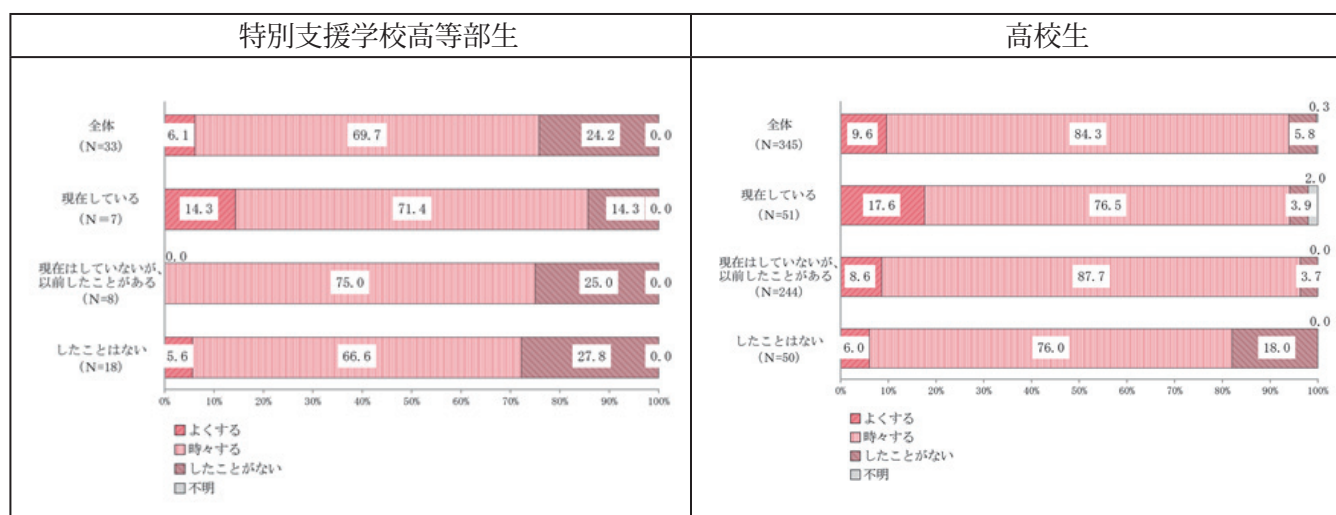
〈問13と問2のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問2 あなたは、「赤い羽根共同募金」「緑の募金」、障がい児（者）や交通遺児のためなどの募金に協力したことがありますか。

1. よくする 2. 時々する 3. したことがない



調査項目の内、問13の「ボランティア活動の経験の有無」の結果と、他の項目との関連をみた。なお、問13への回答について、「1現在している」を選択した者を「している」グループ、「2現在はしていないが、以前したことがある」を「以前」グループ、「したことはない」を「しない」グループと以降略記する。

※特別支援学校高等部生のクロス集計については母数が小さくなるため、高校生との比較が客観的となり得ないことに留意

全体では「時々する」の割合が多い。「時々する」はすべてのグループで60%以上の回答となっている。また、「したことがない」の割合は「している」から「しない」グループになるにつれて多い。

高校生との比較

全体では募金への協力を「したことがない」の割合が高校生と比較して18ポイント多い。「以前」グループは、募金への協力を「よくする」が高校生8%に対して、特別支援学校高等部生0%となっている。

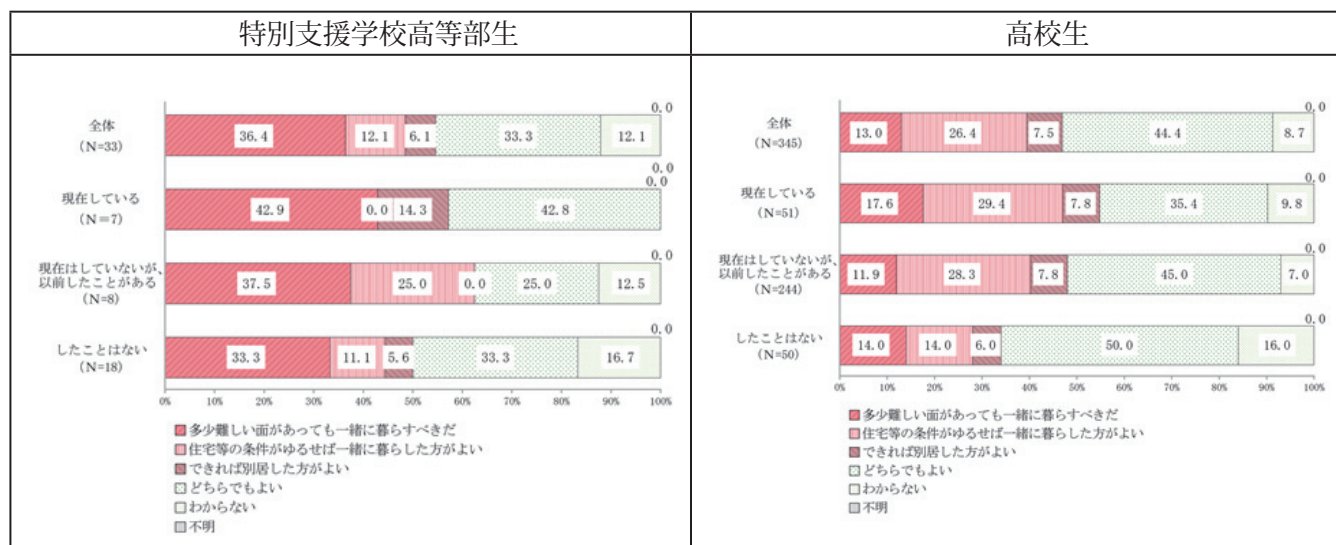
〈問13と問5のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問5 あなたは、あなたの親が祖父母と同居することについてどう考えますか。

1. 多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ 2. 住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい
3. できれば別居した方がよい 4. どちらでもよい
5. わからない



全体では「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」の割合が多い。「以前」グループは「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」と「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」を合わせた同居を肯定する回答が62%と多い。「できれば別居した方がよい」の回答をした者は「以前」グループは存在していない。「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」の割合が少ない。「している」グループは「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」と「どちらでもよい」と回答した者が42%で、「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」と回答した者は存在していない。

高校生との比較

全体では「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」が23ポイント多い。一方で「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」が14ポイント少ない。「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」と「住宅等の条件がゆるせば一緒に暮らした方がよい」という同居を肯定する回答が高校生39%に対して、特別支援学校高等部生は48%であり9ポイント多い。「どちらでもよい」という回答が高校生44%に対して、特別支援学校高等部生33%であり、11ポイント少ない。「している」グループでは、「多少難しい面があっても一緒に暮らすべきだ」が高校生17%に対して、特別支援学校高等部生42%であり25ポイント多い。

〈問13と問9のクロス集計〉

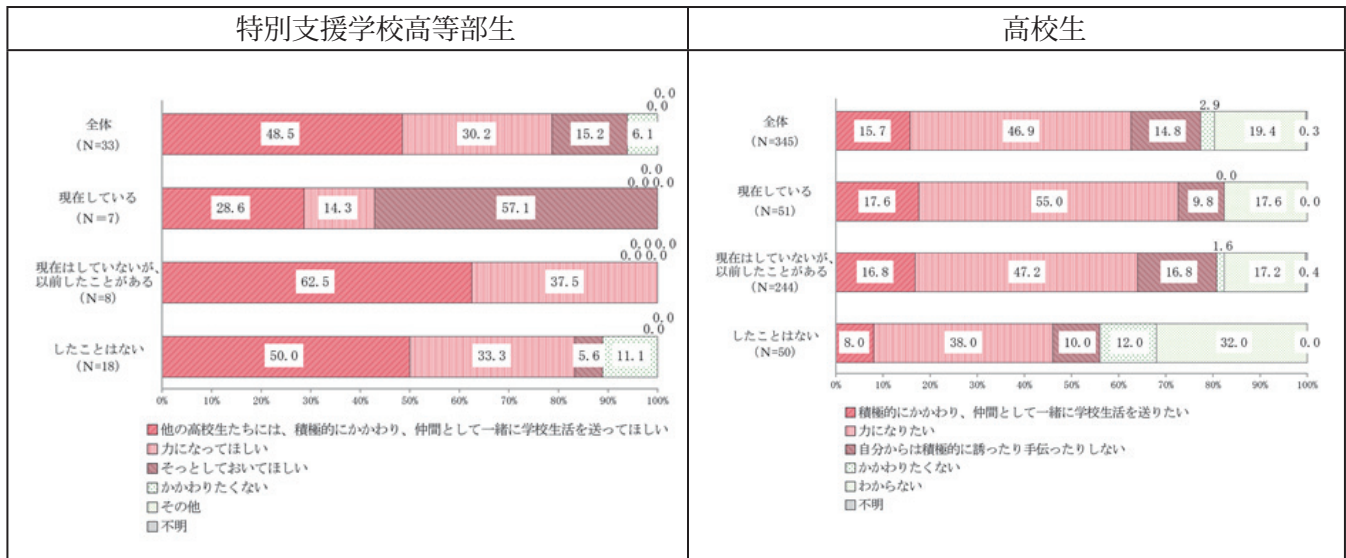
■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問9 あなたは、他の高校生たちと一緒に学校生活を送ることについて、どのように感じますか。

(複数回答)

1. 他の高校生たちには、積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい
 2. 力になってほしい 3. そっとしておいてほしい 4. かかわりたくない
 5. その他



「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい」と「力になってほしい」という高校生とのかかわりに肯定的な回答をした者は、「以前」グループでは100%、「しない」グループでは83%、全体では78%となっており、積極的にかかわりを求める傾向がうかがえる。「している」グループでは「そっとしておいてほしい」と回答した者は57%となっている。

高校生との比較

全体では「積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい」が32ポイント多い。「している」グループでは、特別支援学校高等部生は他の高校生と一緒に学校生活をおくことに「そっとしておいてほしい」が57%の回答に対して、高校生は障がいのある生徒の「力になりたい」が54%と回答している。

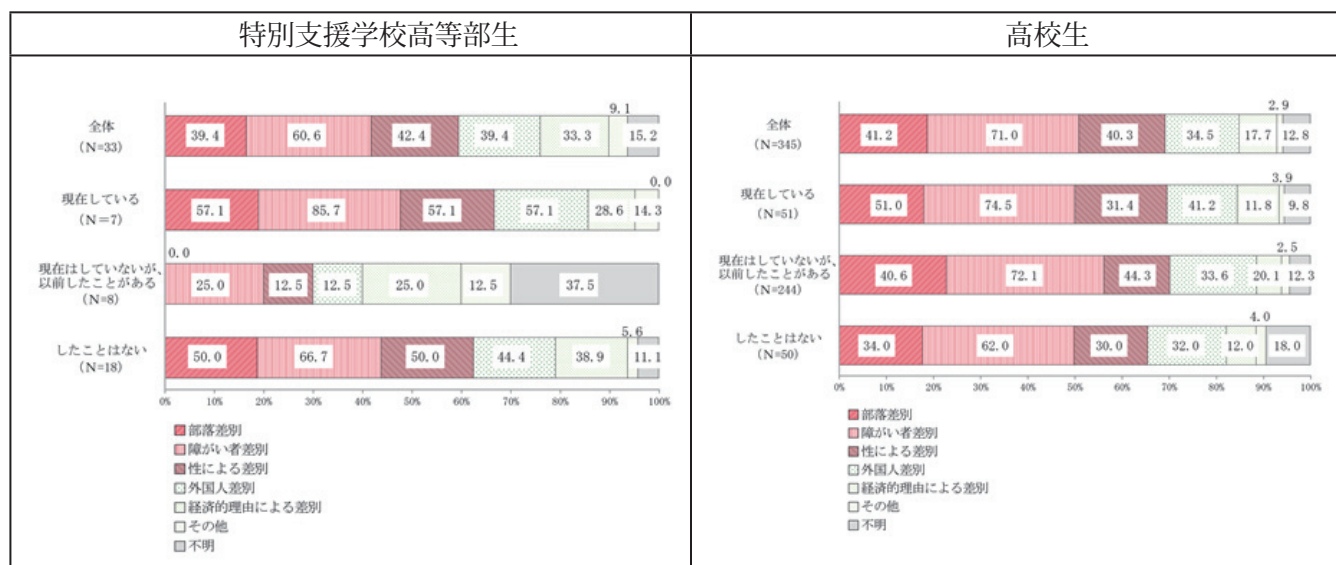
〈問13と問10のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問10 あなたは、身近に差別を感じたり、見聞きしたことがありますか。該当するものをすべて選んでください。

1. 部落差別 2. 障がい者差別 3. 性による差別 4. 外国人差別
5. 経済的理由による差別 6. その他



※複数回答のため合計が100%にならない

「している」と「しない」グループの回答は「部落差別」から「経済的理由による差別」のすべてを回答しているが、「以前」グループの回答は「部落差別」を回答した者はなく、「その他」「不明」をあわせた回答が50%となっている。

高校生との比較

「部落差別」の回答は、「以前」グループの高校生40%に対して、特別支援学校高等部生はいなかった。また、「障がい者差別」の回答は、「以前」グループの高校生72%に対して、特別支援学校高等部生25%であり、47ポイント少ない。

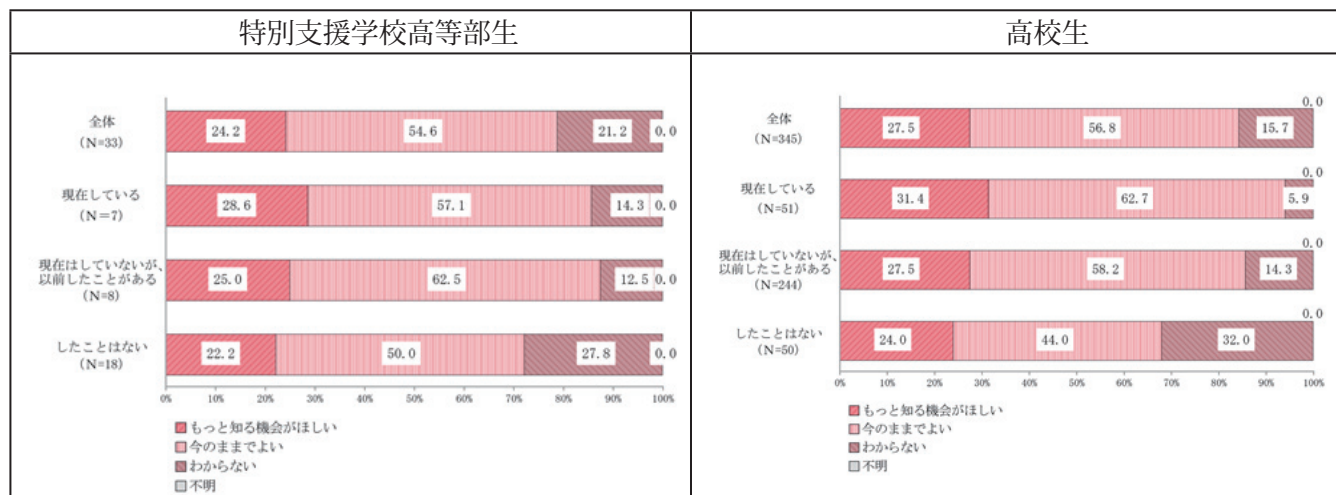
〈問13と問16のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問16 あなたは、学校で福祉について、もっと知る機会があればよいと思いますか。

1. もっと知る機会がほしい 2. 今のままでよい 3. わからない



どのグループも「今のままでよい」が50%以上となっている。「もっと知る機会がほしい」と回答する者の割合は全体では24%で、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて少ない。

高校生との比較

全体では高校生と比較して「もっと知る機会がほしい」が3ポイント、「今のままでよい」が2ポイント少なく、「わからない」が6ポイント多い。

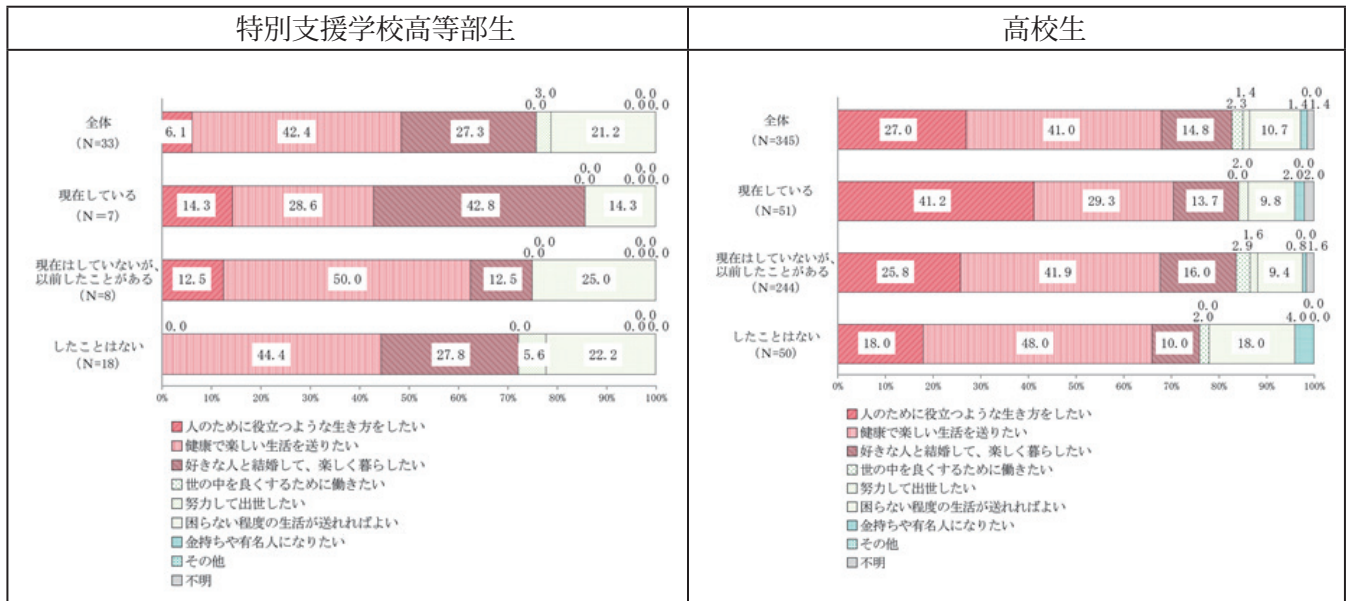
〈問13と問18のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問18 あなたは、将来どのような生き方をしたいと思いますか。次の項目の中から、あなたの考えにいちばん近いものを選んでください。

1. 人のために役立つような生き方をしたい 2. 健康で楽しい生活を送りたい
 3. 好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい 4. 世の中を良くするために働きたい
 5. 努力して出世したい 6. 困らない程度の生活が送ればよい
 7. 金持ちや有名人になりたい 8. その他



全体では「健康で楽しい生活を送りたい」の回答が多い。次いで、「好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい」「困らない程度の生活が送ればよい」の順となっている。「している」グループは「好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい」が42%と最も多い回答となっている。「しない」グループは「人のために役立つような生き方をしたい」と回答した者はいないが、「努力して出世したい」が5%あった。

高校生との比較

全体では「健康で楽しい生活を送りたい」と回答した高校生と特別支援学校高等部生の割合が40%を超えている。「人のために役立つような生き方をしたい」と回答した特別支援学校高等部生は6%で、高校生と比較して21ポイント少なく、その一方で「好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい」の回答が13ポイント、「困らない程度の生活が送ればよい」の回答が11ポイント、高校生と比較して多い。特に、特別支援学校高等部生「している」グループは「好きな人と結婚して、楽しく暮らしたい」と回答した割合が42であり他のグループと比較して最も多い。

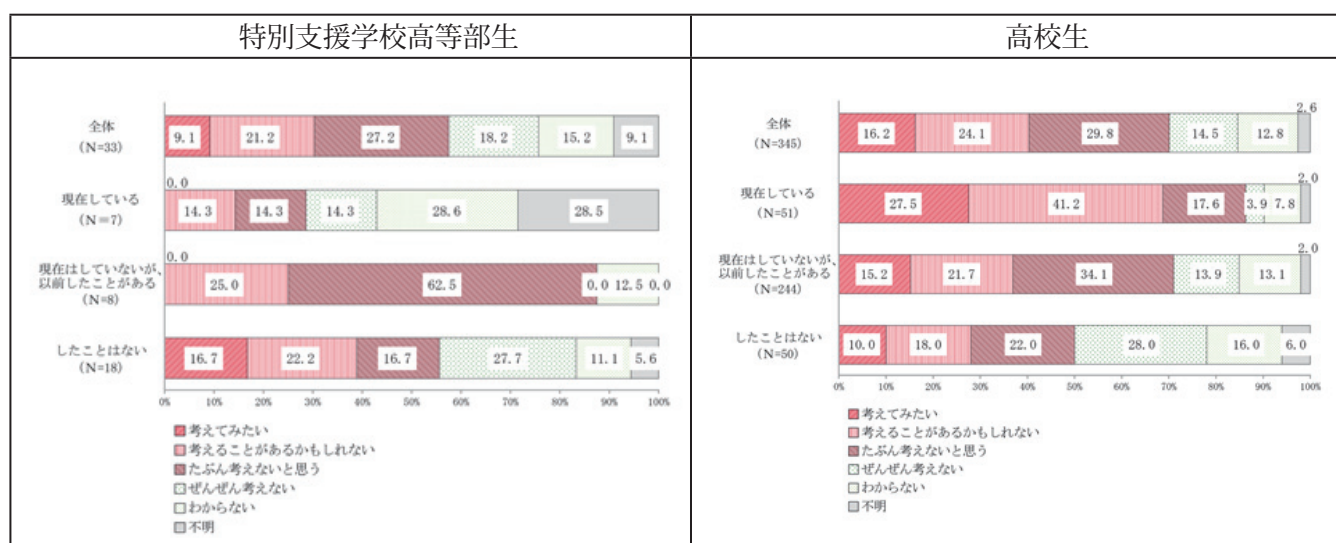
〈問13と問19のクロス集計〉

■問13 あなたは、「ボランティア活動」をしたことがありますか

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問19 あなたが、これから就職を考える場合、就職先として、社会福祉施設（保育所、障がい児施設、児童養護施設、老人ホームなど）や在宅福祉（ホームヘルプサービス）などの福祉の仕事を対象のひとつとして考えることができますか。

1. 考えてみたい 2. 考えることがあるかもしれない
3. たぶん考えないと思う 4. ぜんぜん考えない 5. わからない



全体では「たぶん考えないと思う」「考えることがあるかもしれない」「ぜんぜん考えない」の順となっている。「考えてみたい」の回答をした者は「しない」グループのみとなっている。「考えてみたい」「考えることがあるかも知れない」と福祉の仕事について前向きな回答の割合は少ない。

高校生との比較

全体の割合は特に大きな差は生じていない。全体では「考えてみたい」が7ポイント少なくなっている。「考えてみたい」と回答した高校生は「している」グループ27%、「以前」グループ15%に対して、特別支援学校高等部生は「している」「以前」グループはいない。「考えてみたい」「考えることがあるかも知れない」と福祉の仕事について前向きな回答の割合は、高校生と比較して特別支援学校高等部生は少ない。

《保護者の部》

クロス集計と解説
前回調査との比較

〈問 1 1 と問 8 のクロス集計【問 8-a】〉

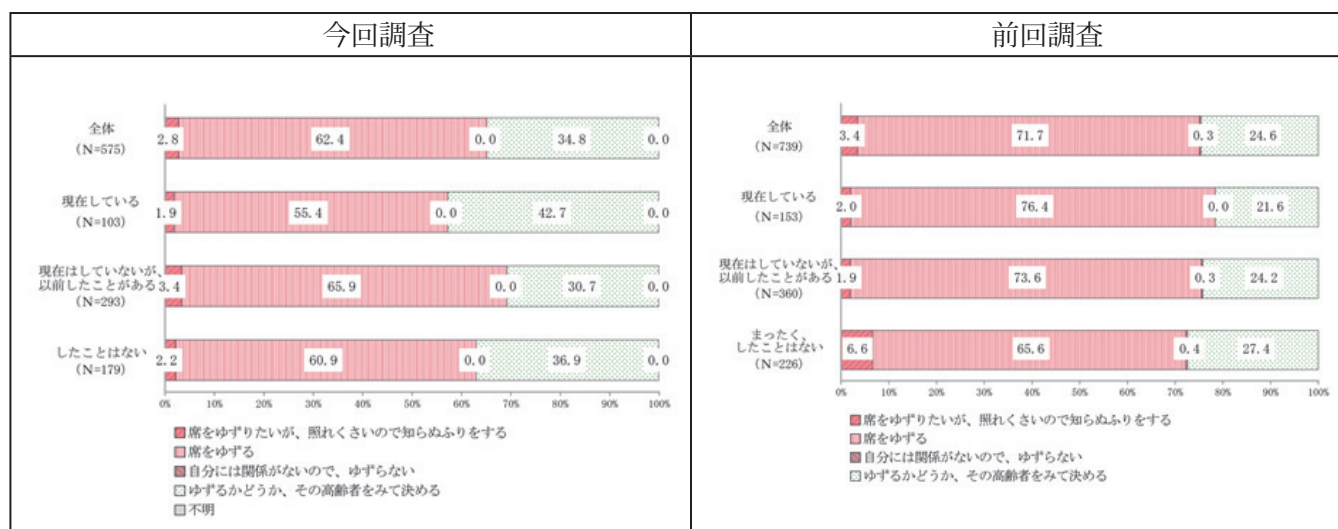
■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 8-a あなたが満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗ってきました。あなたはちょっと体が疲れていました。

そんな時あなたはどんな行動をしますか。〔a. 自分一人のとき〕

1. 席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする 2. 席をゆずる
3. 自分には関係がないので、ゆずらない 4. ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める



全体では「席をゆずる」と回答した者が62%、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」と回答した者が34%であり、前向きな姿勢の回答が96%を占めている。また、「自分には関係がないので、ゆずらない」と回答した者は存在していない。

前回調査との比較

全体では「席をゆずる」が9ポイント少なく、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が10ポイント多い。また、「自分には関係がないので、ゆずらない」と回答した者は存在していない。「している」グループは、「席をゆずる」が前回76%に対して、今回55%であり21ポイント少なく、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が21ポイント多い。「知らぬふりをする」と「ゆずらない」をあわせた消極的な回答は少ない。

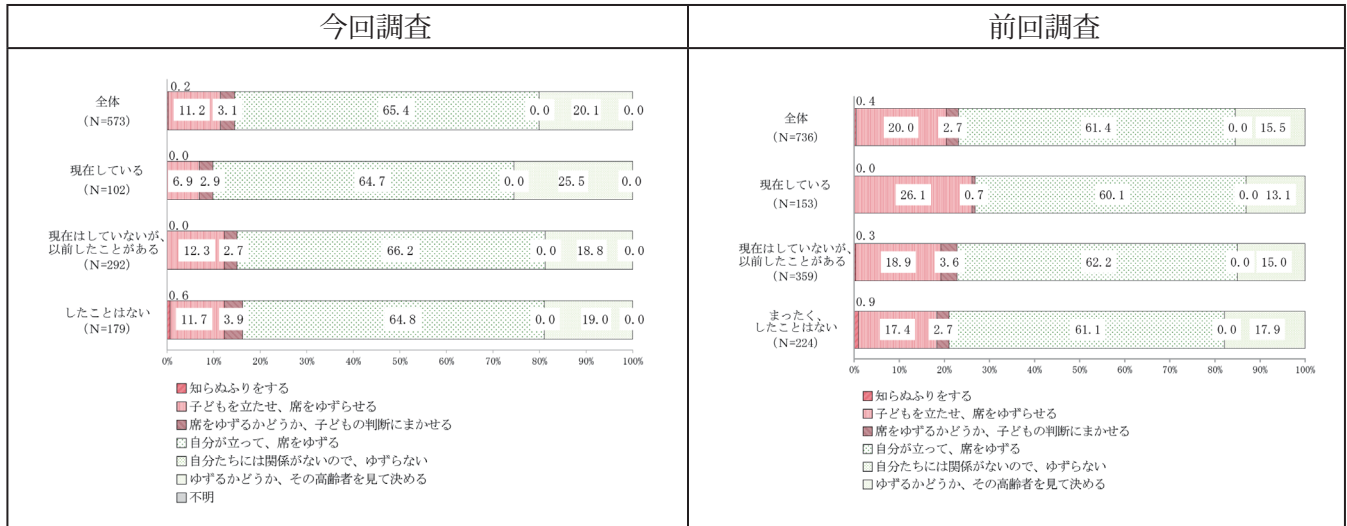
〈問 1 1 と問 8 のクロス集計【問 8-b】〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 8-b 【b. 子どもと一緒にするとき】

1. 知らぬふりをする 2. 子どもを立たせ、席をゆずらせる
 3. 席をゆずるかどうか、子どもの判断にまかせる 4. 自分が立って、席をゆずる
 5. 自分たちには関係がないので、ゆずらない 6. ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める



全体では「自分が立って席をゆずる」が多い。次いで、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」「子どもを立たせ席をゆずらせる」の順となっている。「自分たちには関係がないので席をゆずらない」と回答した者は存在していない。

前回調査との比較

全体では「自分が立って席をゆずる」「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」が4ポイント多い。「子どもを立たせ席をゆずらせる」は9ポイント少ない。また、前回は「している」から「しない」グループになるにつれて「子どもを立たせ席をゆずらせる」の回答の割合が減少の傾向がうかがえるのに対して、今回は「している」から「しない」グループになるにつれて「子どもを立たせ席をゆずらせる」の回答の割合が増加の傾向がうかがえる。回答の上位は、保護者自らが行動、判断を示す結果となる。子どもに席をゆずらせる・まかせる、の回答は下位である。

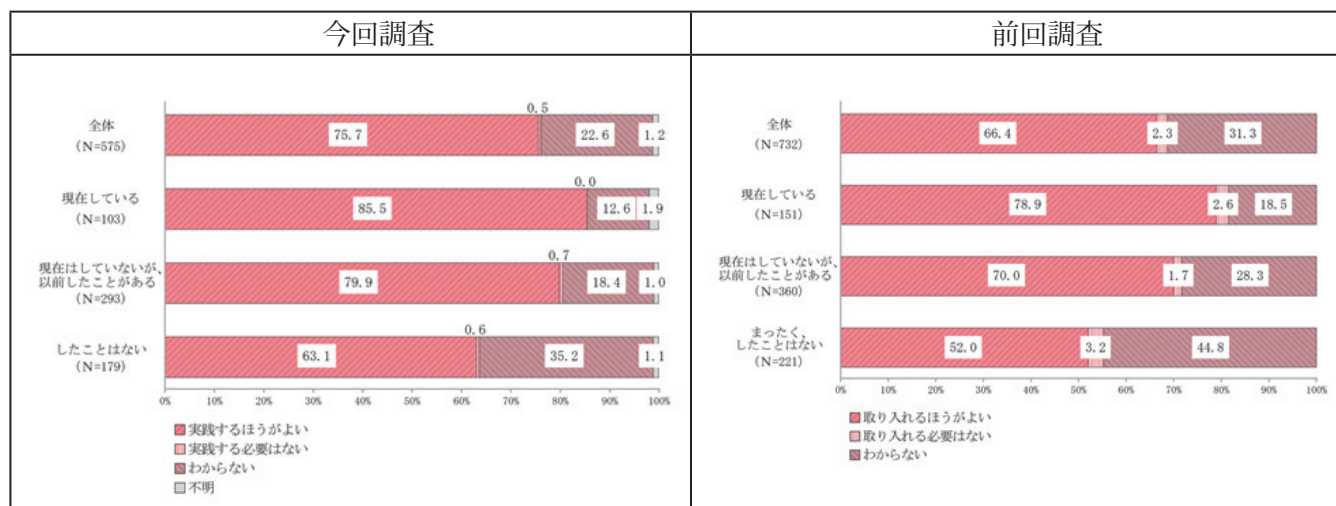
〈問 1 1 と問 1 2 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 12 あなたは、学校教育の中に「福祉教育・学習」を実践することについてどうお考えになりますか。

1. 実践するほうがよい 2. 実践する必要はない 3. わからない



全体では、「実践するほうがよい」と回答した者が75%を占めているが、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて「実践するほうがよい」が少なく、「している」と「しない」グループでは22ポイントの差が生じている。どのグループも「実践するほうがよい」と肯定的に回答している者が63%以上である。

前回調査との比較

全体では、「実践するほうがよい」と回答した者が9ポイント多く、「実践する必要はない」と回答した割合は少ない。

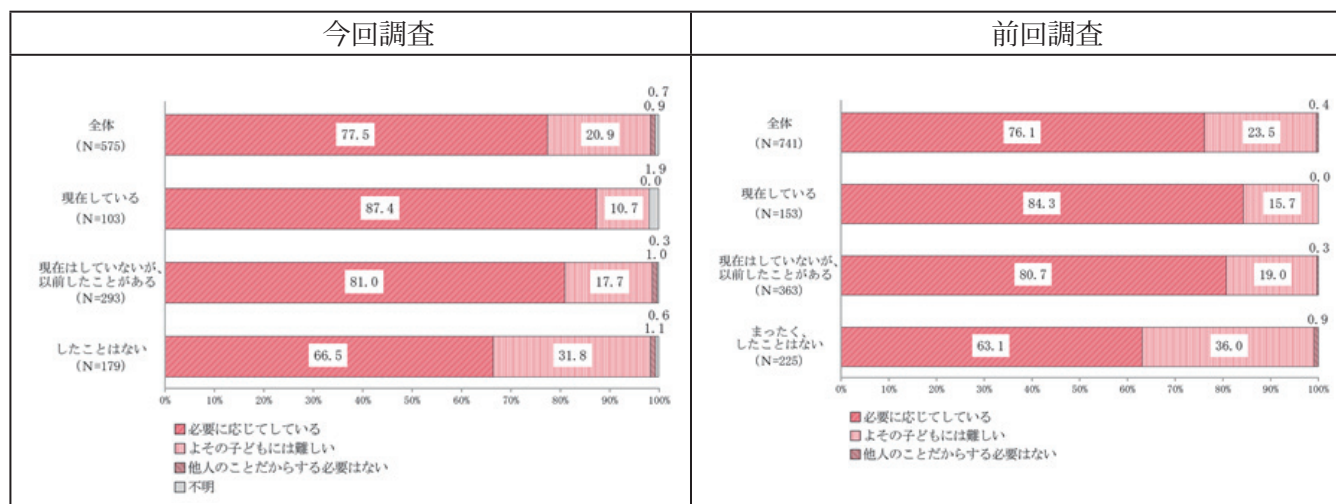
〈問 1 1 と問 1 4 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 14 あなたは、よその子どもに注意したり、ほめたりできますか。

1. 必要に応じてしている 2. よその子どもには難しい
3. 他人のことだからする必要はない



全体では、「必要に応じてしている」と回答した者が77%で、「している」から「以前」「しない」グループになるにつれて「必要に応じてしている」が少ない。

前回調査との比較

全体では前回と比較して「必要に応じてしている」と回答した者が1ポイント多い。「よその子どもには難しい」と回答した者は3ポイント少ない。どのグループも66%以上が「必要に応じてしている」と回答している。

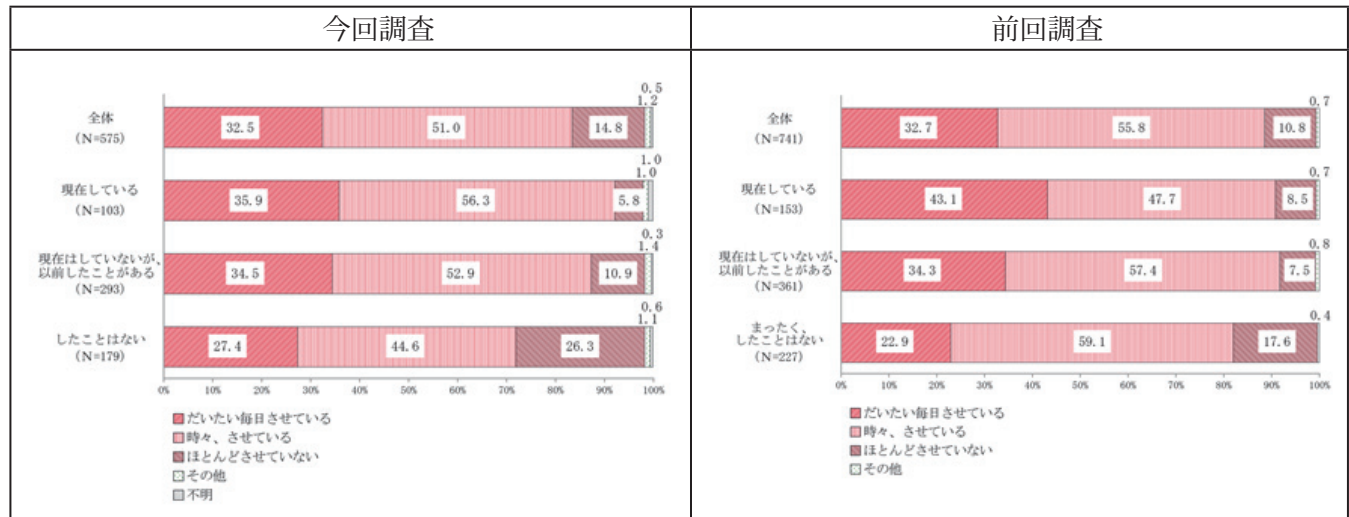
〈問 1 1 と問 1 5 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 15 あなたは子どもに家族の一員として、何かお手伝いをさせていますか。

1. だいたい毎日させている 2. 時々、させている
3. ほとんどさせていない 4. その他



全体では、「だいたい毎日させている」と回答した者が32%、「時々、させている」と回答した者が51%であり、お手伝いをさせている割合は83%を占めている。「している」から「以前」「しない」グループになるにつれてそれぞれ少ない。一方で「ほとんどさせていない」と回答した者は多い。

前回調査との比較

全体では前回と比較して「時々、させている」と回答した者が4ポイント少なく、「ほとんどさせていない」と回答した者が4ポイント多い。「している」グループは「だいたい毎日させている」と回答した者が35%と前回と比較して7ポイント少なく、「時々、させている」と回答した者が8ポイント多い。「以前」グループは「時々、させている」と回答した者が5ポイント少なく、「ほとんどさせていない」と回答した者が3ポイント多い。

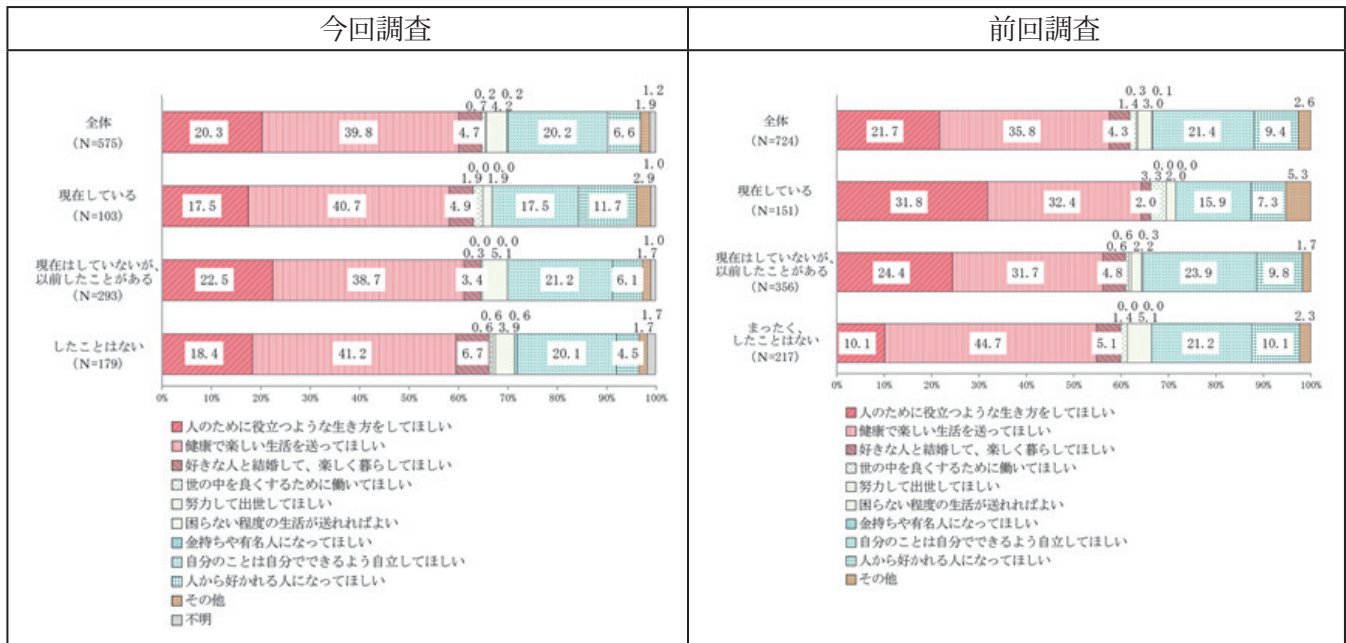
〈問 1 1 と問 1 8 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことはない

■問 18 あなたは、子どもに将来どのような生き方をしてほしいと思いますか。次の項目の中から、あなたの考えにいちばん近いものを選んでください。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. 人のために役立つような生き方をしてほしい | 2. 健康で楽しい生活を送ってほしい |
| 3. 好きな人と結婚して、楽しく暮らしてほしい | 4. 世の中を良くするために働いてほしい |
| 5. 努力して出世してほしい | 6. 困らない程度の生活が送ればよい |
| 7. 金持ちや有名人になってほしい | 8. 自分のことは自分でできるよう自立してほしい |
| 9. 人から好かれる人になってほしい | 10. その他 |



「健康で楽しい生活を送ってほしい」と回答した者は全体で 39% となっており、どのグループも割合が多い。次いで、「人のために役立つような生き方をしてほしい」と「自分のことは自分でできるよう自立してほしい」と回答した者がそれぞれ 20% となっている。

前回調査との比較

全体では前回と比較して割合の構成が同様となっている。「人のために役立つような生き方をしてほしい」はどのグループも前回と比較して少ない。「している」グループは「人のために役立つような生き方をしてほしい」が前回 31% に対して今回 17% であり、14 ポイント少ない。

《特別支援学校保護者の部》

クロス集計と解説
保護者との比較

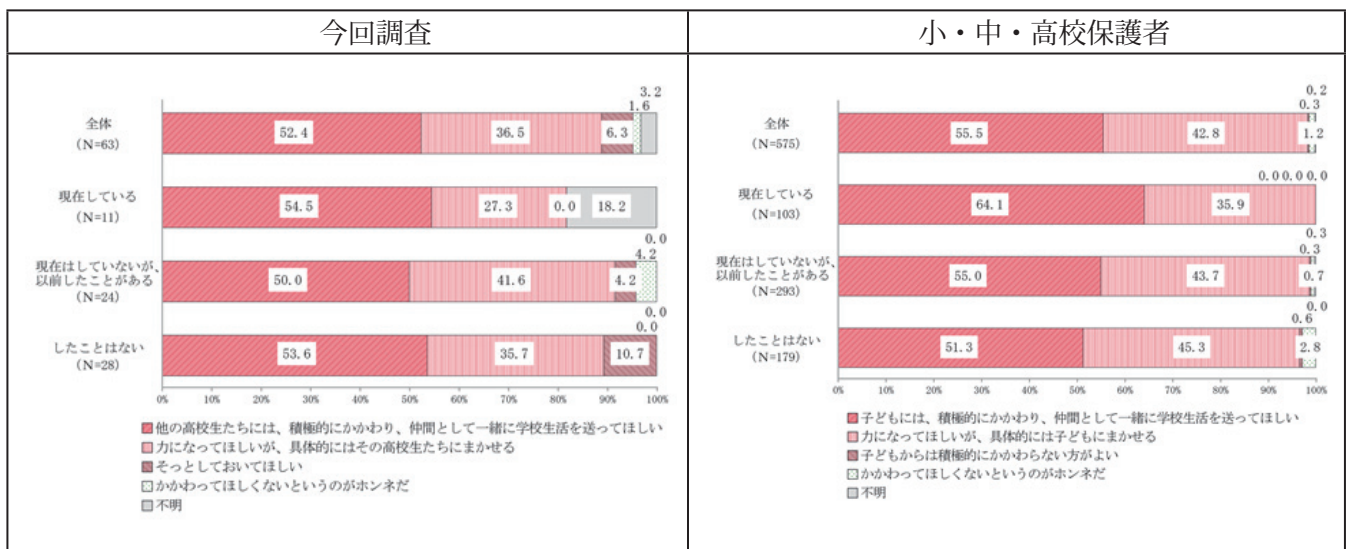
〈問 1 1 と問 7 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 7 あなたは、あなたの子どもが、他の高校生たちと一緒に学校生活をするということについてどのように感じますか。

1. 他の高校生たちには、積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい
 2. 力になってほしいが、具体的にはその高校生たちにまかせる
 3. そっとしておいてほしい
 4. かかわってほしくないというのがホンネだ



調査項目の内、問 1 1 の「福祉活動・ボランティア活動の経験の有無」の結果と、他の項目との関連をみた。なお、問 1 1 への回答について、「1 現在している」を選択した者を「している」グループ、「2 現在はしていないが、以前したことがある」を「以前」グループ、「したことはない」を「しない」グループと以降略記する。

※特別支援学校保護者のクロス集計については母数が小さくなるため、小・中・高校保護者との比較が客観的となり得ないことに留意

「他の高校生たちには、積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい」と回答した者が全体では 50% を超え、すべてのグループも 50% 以上となっている。次いで、「力になってほしいが、具体的にはその高校生たちにまかせる」となっている。「他の高校生たちには、積極的にかかわり、仲間として一緒に学校生活を送ってほしい」と「力になってほしいが、具体的にはその高校生たちにまかせる」と高校生とのかかわりに肯定的な回答をした者をあわせると 80% を超えている。

小・中・高校保護者との比較

小・中・高校保護者と比較して「力になってほしいが、具体的にはその高校生たちにまかせる」3ポイント少ない。また、「そっとしておいてほしい」と回答した者は、小・中・高校保護者と比較して6ポイント多い。

〈問 1 1 と問 8 - 1 のクロス集計〉

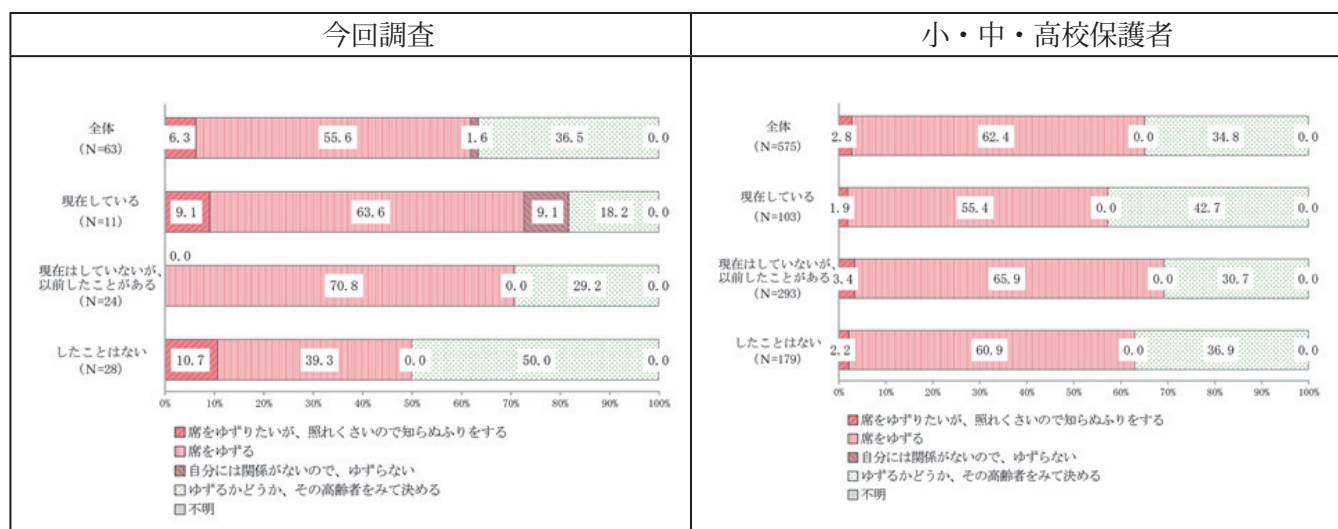
■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 8-1 あなたが満席のバスや列車に乗っているとします。その時、高齢者が乗ってきました。あなたはちょっと体が疲れていました。

そんな時あなたはどんな行動をしますか。〔a. 自分一人のとき〕

1. 席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする 2. 席をゆずる
3. 自分には関係がないので、ゆずらない 4. ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める



全体では「席をゆずる」が50%を超えている。次いで「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」となっている。「している」から「しない」グループになるにつれて「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」の割合が増加していく傾向がみられる。「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」については、「している」と「しない」では31ポイントの差が生じている。

小・中・高校保護者との比較

全体では小・中・高校保護者と比較して「席をゆずる」は6ポイント少ない。「しない」グループの「席をゆずる」と回答した者は小・中・高校保護者60%に対して、特別支援学校保護者39%であり、21ポイント少ない。また、「以前」グループの「席をゆずりたいが、照れくさいので知らぬふりをする」と回答した者は小・中・高校保護者3%に対して、特別支援学校保護者は存在していない。一方で、「している」グループの「自分には関係がないので、ゆずらない」と回答した者は小・中・高校保護者は存在していないのに対して、特別支援学校保護者は9%である。

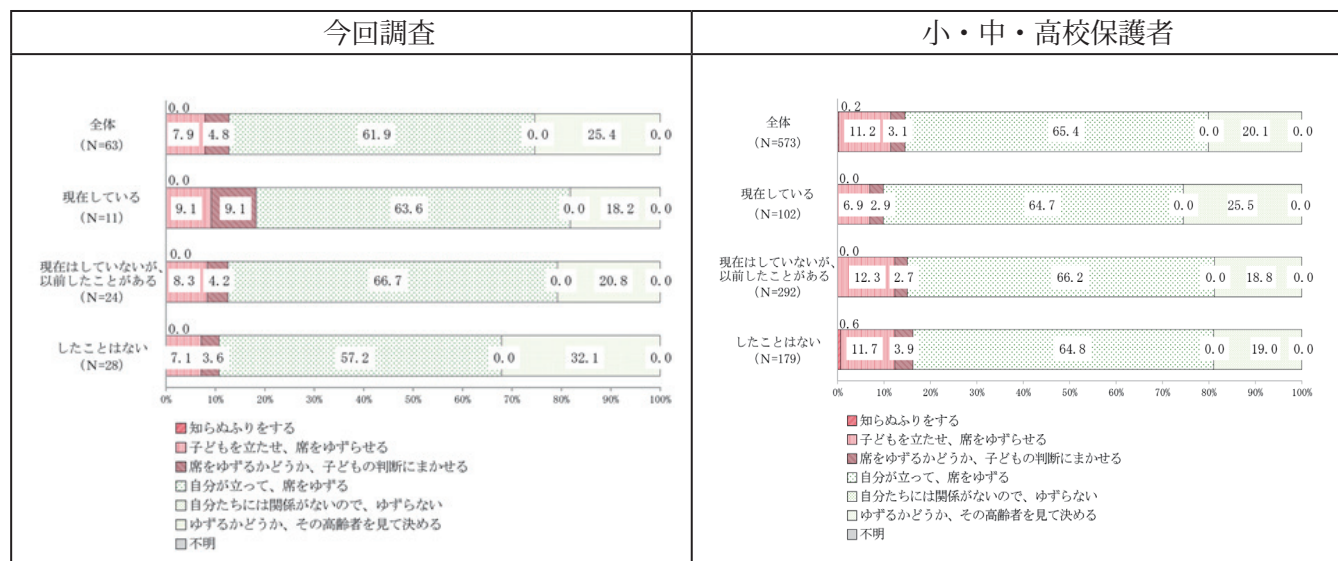
〈問 1 1 と問 8 - 1 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 8-1 [b. 子どもと一緒にいるとき]

1. 知らぬふりをする 2. 子どもを立たせ、席をゆずらせる
3. 席をゆずるかどうか、子どもの判断にまかせる 4. 自分が立って、席をゆずる
5. 自分たちには関係がないので、ゆずらない 6. ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める



全体では「自分が立って、席をゆずる」は60%を超えている。次いで、「ゆずるかどうか、その高齢者を見て決める」の順となっている。「している」から「しない」グループになるにつれて「ゆずるかどうか、その高齢者をみて決める」の割合が増加していく傾向がみられる。「ゆずるかどうか、その高齢者をみて決める」については、「している」と「しない」では13ポイントの差が生じている。「知らぬふりをする」と「自分たちには関係がないので、ゆずらない」の消極的な回答をした者は存在していない。

小・中・高校保護者との比較

全体では割合は特に大きな差は生じていない。全体では「ゆずるかどうかその高齢者を見て決める」が5ポイント多くなっている。「子どもの判断にまかせる」と回答した小・中・高校保護者「している」グループ2%に対して、特別支援学校保護者「している」グループは9%である。「ゆずるかどうかその高齢者を見て決める」と回答した小・中・高校保護者「している」グループ19%に対して、特別支援学校保護者「している」グループは32%である。

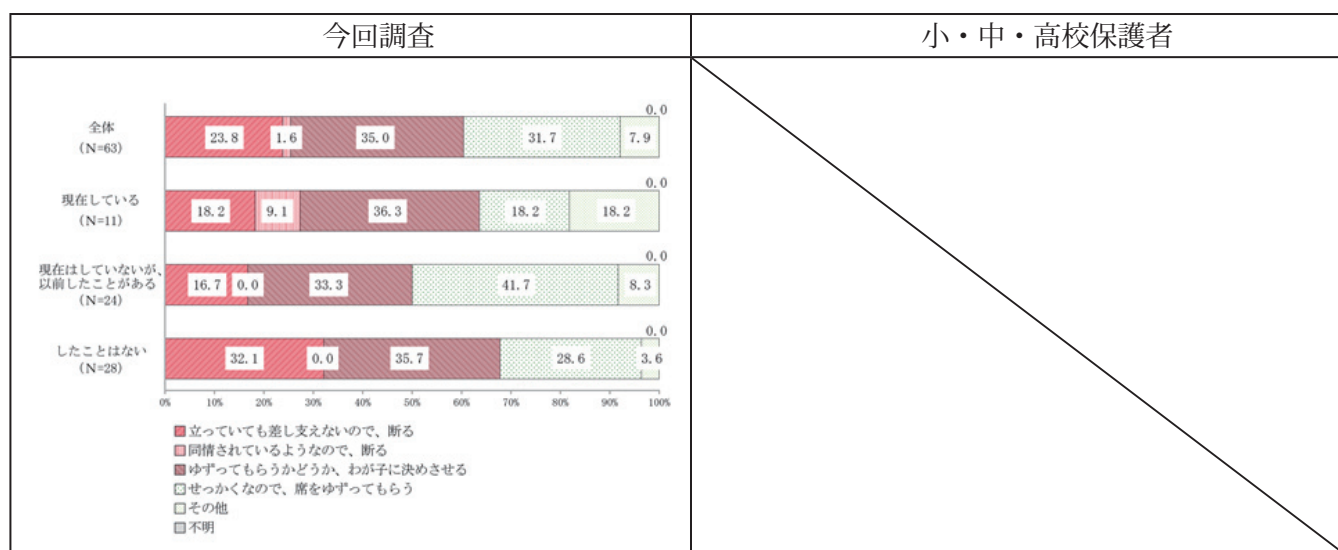
〈問 1 1 と問 8 - 2 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 8-2 あなたが満席のバスや列車に乗ったとき、席に座っている方があなたの子どもに席をゆずってくれました。そんな時あなたはどうしますか？

1. 立っていても差し支えないので、断る 2. 同情されているようなので、断る
3. ゆずってもらうかどうか、わが子に決めさせる 4. せっかくなので、席をゆずってもらう
5. その他



全体では「ゆずってもらうかどうか、わが子に決めさせる」が多い。次いで、「せっかくなので、席をゆずってもらう」「立っていても差し支えないので、断る」の順となっている。「ゆずってもらうかどうか、わが子に決めさせる」と「せっかくなので、席をゆずってもらう」の好意的に受止める回答をした者は6割を超えている。「している」グループは「同情されているようなので、断る」と回答した者は9%存在している。「立っていても差し支えないので、断る」と回答したグループのうち「してない」グループは32%と一番多い。

小・中・高校保護者との比較

※調査項目がないため比較できない。

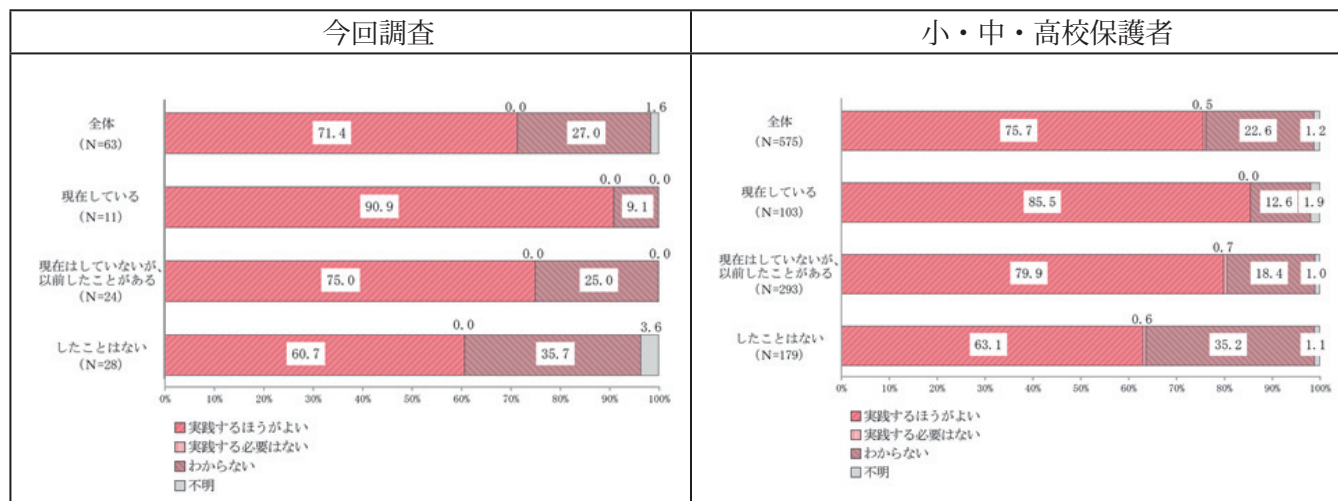
〈問 1 1 と問 1 2 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 12 あなたは、学校教育の中で「福祉教育・学習」を実践することについてどうお考えになりますか。

1. 実践するほうがよい 2. 実践する必要はない 3. わからない



「実践するほうがよい」と回答した者が多く、「している」グループでは90%を超え、「しない」グループでも60%を超え、全体では70%以上となっている。「している」から「しない」グループになるにつれて「実践するほうがよい」が少なくなっており、「している」と「しない」グループでは30ポイントの差が生じている。「実践する必要はない」と回答した者は存在していない。

小・中・高校保護者との比較

全体では小・中・高校保護者と比較して「実践するほうがよい」が4ポイント少ないが、「している」グループでは小・中・高校保護者と比較して5ポイント多い。

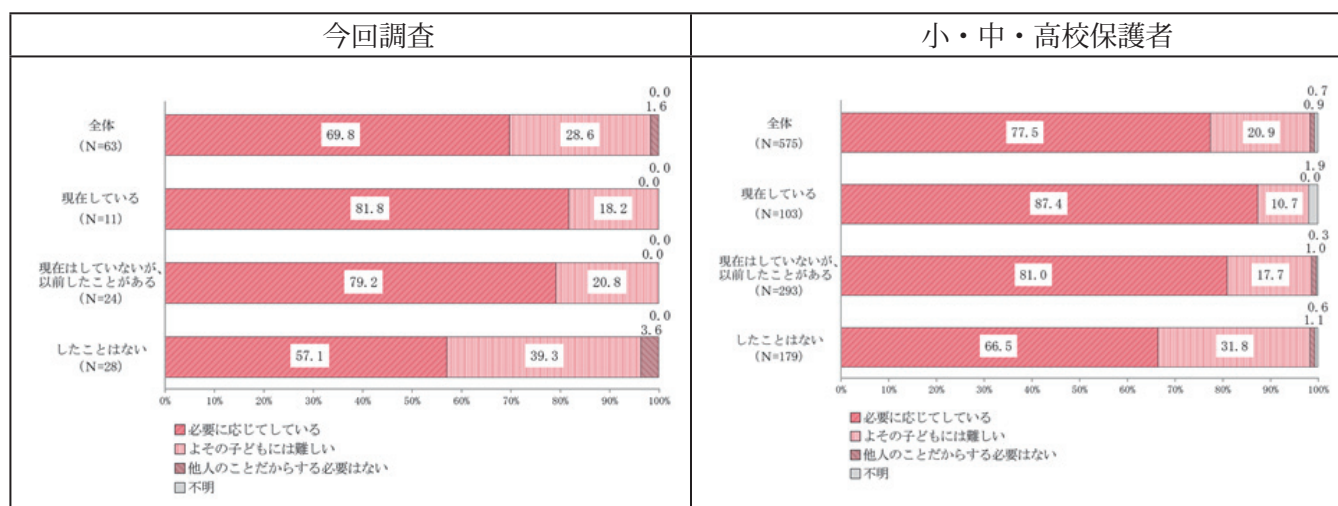
〈問 1 1 と問 1 4 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 14 あなたは、よその子どもに注意したり、ほめたりできますか。

1. 必要に応じてしている 2. よその子どもには難しい
3. 他人のことだからする必要はない



全体では「必要に応じてしている」が69%となっている。「している」から「しない」グループになるにつれて「必要に応じてしている」が減少している。一方で、「よその子どもには難しい」は「している」から「しない」グループになるにつれて増加している。

小・中・高校保護者との比較

全体では小・中・高校保護者と比較して「必要に応じてしている」が8ポイント少なく、「よその子どもには難しい」が8ポイント多い。

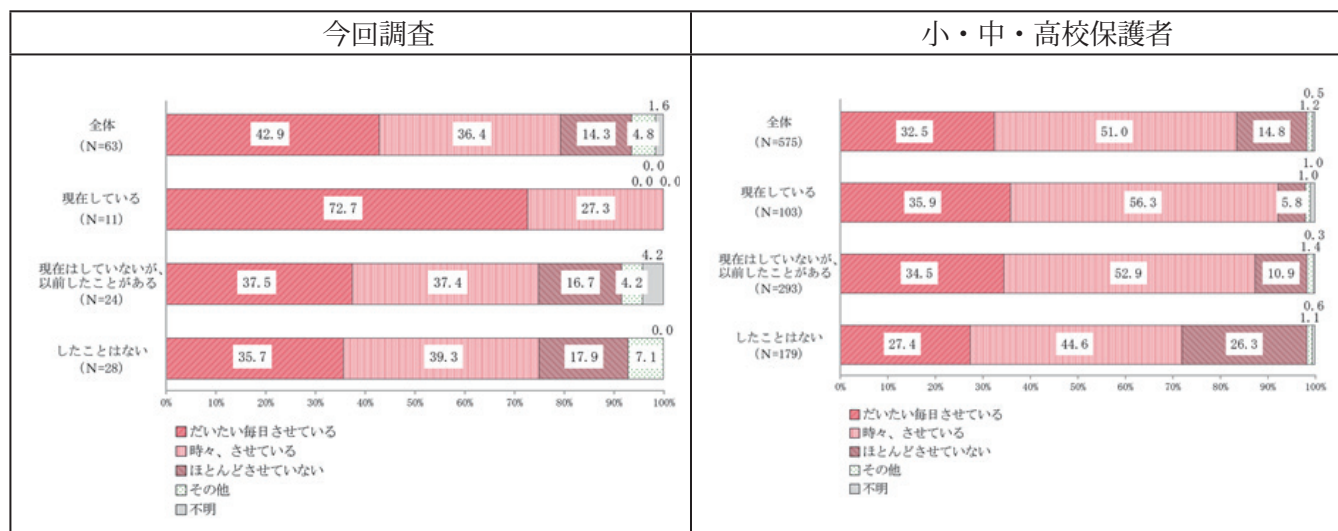
〈問 1 1 と問 1 5 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 15 あなたは、子どもに家族の一員として、何かお手伝いをさせていますか。

1. だいたい毎日させている 2. 時々、させている 3. ほとんどさせていない
4. その他



全体では「だいたい毎日させている」が多い。次いで「時々、させている」となっている。「だいたい毎日させている」は「している」グループ72%に対して、「以前」グループは37%、「しない」グループは35%である。「している」グループは「ほとんどさせていない」と回答した者は存在していない。

小・中・高校保護者との比較

全体では小・中・高校保護者と比較して「だいたい毎日させている」が10ポイント多く、「時々、させている」が15ポイント少ない。

「だいたい毎日させている」と回答した者のうち特別支援学校保護者「している」グループは72%であり「以前」「しない」グループと、小・中・高生保護者の「している」から「しない」グループのなかで最も多い。

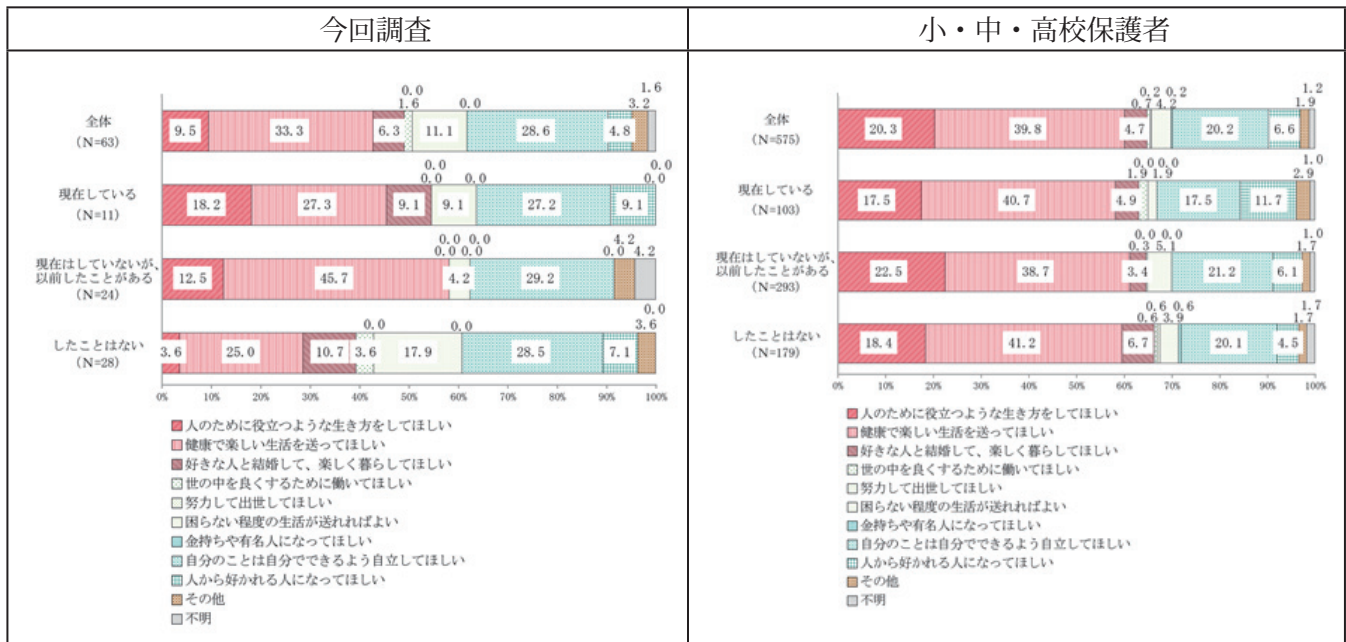
〈問 1 1 と問 1 8 のクロス集計〉

■問 11 あなたは、「福祉活動」や「ボランティア活動」をしたことがありますか。

1. 現在している 2. 現在はしていないが、以前したことがある 3. したことがない

■問 18 あなたは、子どもに将来どのような生き方をしてほしいと思いますか。次の項目の中から、あなたの考えにいちばん近いものを選んでください。

1. 人のために役立つような生き方をしてほしい 2. 健康で楽しい生活を送ってほしい
 3. 好きな人と結婚して、楽しく暮らしてほしい 4. 世の中を良くするために働いてほしい
 5. 努力して出世してほしい 6. 困らない程度の生活が送ればよい
 7. 金持ちや有名人になってほしい 8. 自分のことは自分でできるよう自立してほしい
 9. 人から好かれる人になってほしい 10. その他



全体では「健康で楽しい生活を送ってほしい」が多い。次いで、「自分のことは自分でできるよう自立してほしい」の順となっている。「健康で楽しい生活を送ってほしい」は「以前」グループは45%であるが、「している」「しない」グループは20%台となっている。「自分のことは自分でできるよう自立してほしい」はすべてのグループで30%近い回答となっている。「人のために役立つような生き方をしてほしい」は「している」から「しない」グループになるにつれて減少している。「人のために役立つような生き方をしてほしい」の順位は低く「困らない程度の生活が送ればよい」が上位となっている。

小・中・高校保護者との比較

全体では「困らない程度の生活が送ればよい」は小・中・高校保護者4%に対して、特別支援学校保護者11%であり7ポイント多い。また、「人のために役立つような生き方をしてほしい」と回答した者は小・中・高校保護者20%に対して、特別支援学校保護者9%であり11ポイント少ない。「健康で楽しい生活を送ってほしい」は、小・中・高校保護者39%に対して、特別支援学校保護者33%で6ポイント少なく、「自分のことは自分でできるよう自立してほしい」は小・中・高校保護者20%に対して、特別支援学校保護者28%で8ポイント多い。「しない」グループでは「人のために役立つような生き方をしてほしい」と回答した者は小・中・高校保護者18%に対して、特別支援学校保護者3%であり15ポイントの差が生じている。

調査結果の特徴点

調査結果（クロス集計）の特徴点と今後の課題

平成30年度実施「福祉に関する意識・実態調査」の調査結果の中から特に重要と思われる質問間のクロス集計を行った結果のうち特徴的な内容を報告。

1 小・中学生の部

「生活の満足度」では、家事分担・お手伝いの頻度にかかわらず学校や家庭の生活に「満足している」と回答した小・中学生が多くなっている傾向がうかがえる。また、「不満がある」「楽しくない」「どちらともいえない」の回答が30%以上存在していることを念頭に、本来楽しいはずである学校や家庭の環境づくり、人間関係づくりのための働きかけが引き続き大切である。

「福祉的な行動」では、社会で起こりうるいろいろな場面で積極的な行動をすると回答した小・中学生の割合が前回調査と比べて多くなっている。満席のバスや列車に高齢者が乗車したとき、公園に落ちていた紙くずをみたとき、公園の花壇に植えてある花を近所の子どもが勝手にとっているのを見たときの対応では「席をゆずる」「拾ってクズ入れに入れる」「すぐその子に注意する」の回答が前回調査と比べても割合が多くなっている。満席のバスや列車に高齢者が乗車したときの行動では、家事分担・お手伝いを「毎日している」から「しない」

になるにつれて「照れくさいので知らぬふりをする」「他の人がゆずるのを待つ」の消極的な行動をすると回答した割合が小・中学生ともに多くなる傾向がうかがえる。

「家事分担・お手伝い」の結果と、他の項目との関連をみると、特に、家事分担・お手伝いをまったくしていない者も生活に満足している割合や、席をゆずる・紙くずを拾う割合が多くなっていることは着目する点である。子どもたちの家庭での役立ち感や居場所の有無にかかわらず、日々の生活への満足感、福祉的行動や考え方の意識が好転しているといえる。

2 高校生の部

「障がいのある生徒との交流」では、ボランティア活動をしたことがある生徒は60%以上が「積極的にかかわりたい」「力になりたい」と回答している。ボランティア活動を現在している生徒は、「力になりたい」の回答が21ポイント多いが、「積極的にかかわりたい」の回答が25ポイント少なくなっている点が特徴的である。ボランティアの活動機会や活動領域の広がりをみせているなか、障がいのある生徒とのつながりや交流の場面をつくることで、障がいに対する肯定的な意識を行動に結びつくように働きかけることが大切である。

「福祉を学ぶ機会」では、「もっと知る機会がほしい」の回答が前回調査と比較して9ポイント多くなっている。ボランティア活動をしたことはない生徒では、「もっ

と知る機会がほしい」の回答が前回調査と比較して7ポイント多くなっている。福祉の授業を中心に、家庭科やLHRなどで学びの機会がさらに増えることが望まれる。

「**将来の進路と福祉**」では、福祉に関わる職業を進路先として考慮する生徒の割合は40%台と前回調査と同様である。ボランティア活動を「している」から「したことはない」になるにつれて、福祉に関わる職業を進路先として考えない傾向がうかがえるため、進学・職業を含めた福祉のイメージが魅力的であると伝わる広報・啓発を更に取組む必要がある。

3 特別支援学校高等部生の部

「**他の高校生とのかかわり**」では、「積極的にかかわってほしい」「力になってほしい」の回答が78%である一方で、高校生は障がいのある生徒との交流を「積極的にかかわりたい」「力になりたい」の回答が62%である。高校生と比較して、特別支援学校高等部生はボランティア活動の有無にかかわらず、他の高校生との交流機会を望んでいる傾向がうかがえる。

「**福祉を学ぶ機会**」では、ボランティア活動を「している」から「したことはない」になるにつれて、「もっと知る機会がほしい」の回答の割合が少なくなっている傾向は、高校生の回答の傾向と同様である。ボランティア活動の有無と福祉の学びの意欲が密接に関連していることから、ボランティア活動の機会と福祉情報の提供が引続

き大切であるとともに、学校間のつながり・交流や、学校と地域が連携した取組の支援が必要である。

4 保護者（小・中学校、高校）の部

「**子どもの障がいのある生徒との学校生活**」では、福祉活動やボランティア活動をしたことがある保護者は98%が「積極的にかかわってほしい」「力になってほしい」と回答をしており、この肯定的な傾向は前回調査と比較して同様である。福祉活動やボランティア活動を「している」から「したことはない」になるにつれて、「積極的にかかわってほしい」の回答の割合が少なくなっている。

「**学校教育の中に福祉教育・学習の実践**」では、「実践するほうがよい」が75%の回答があり、前回調査と比較して9ポイント多くなっている。福祉活動やボランティア活動をしている保護者ほど肯定的な回答を示しており、今後も福祉活動の参加を更に促すと同時に、地域と学校が連携するなどして児童・生徒への福祉の理解や啓発のための取組みが進むよう保護者や学校へ働きかけることが必要である。

5 特別支援学校保護者の部

「**子どもの他の高校生との学校生活**」では、福祉活動やボランティア活動の有無にかかわらず50%以上が「積極的にかかわってほしい」と回答をしており、この傾

向は小・中学校、高校の保護者と比較しても同様の傾向であり、相互の交流について肯定的に受け止めている。

「学校教育の中に福祉教育・学習の実践」では、福祉活動やボランティア活動の有無にかかわらず60%以上が「実践するほうがよい」と回答をしており、この傾向は小・中学校、高校の保護者と比較しても同様の傾向である。特別支援学校において福祉教育・学習の取組みが展開されるよう特別支援学校保護者を含めた働きかけが必要である。

6 今後の課題

前回調査のまとめでは、「教育階梯やライフステージの発達的な特徴を踏まえた支援」と「幸福の追求・実現や生存権を前提とした全ての人が福祉の主体者であることを学ぶ支援」の取組み課題を述べた。

今回調査のまとめでは、単純集計結果とクロス集計結果の特徴的な傾向から考えられる課題としては、「障がい者に対する福祉教育・学習の展開」と「福祉を学ぶ機会の確保」に向けた取組みである。

第一に、「障がい者に対する福祉教育・学習の展開」では、「福祉のイメージ」の設問で、特別支援学校高等部生は福祉対象と福祉サービス主体を限定的に捉えていること、また、特別支援学校保護者は福祉対象を限定的に捉えていることがうかがえた。障がい者も自らが権利主体であるとともに、自らを含むすべての人が福祉の主体であること、また、福祉サービス主体とは住民も含めた協働的な取組みであることへの理解について、障がい者を対象とする福祉教育・学習の実践が進められ

なければならない。

第二に、「福祉を学ぶ機会の確保」では、学校で福祉について知る機会を望む生徒の割合が多いことや、他校の生徒と交流機会を望んでいることがうかがえた。また、保護者も、学校教育の中で福祉教育・学習を実践することを望んでいる。福祉を学ぶ対象は全ての人々であり、教育階梯やライフステージに沿った展開が継続されるよう、引続き社会福祉協議会や学校の取組みを支援し、学習活動の定着を図る必要がある。これに加えて、児童・生徒に対する福祉教育・学習の機会は、学校教育以外の場（例：社会教育施設）においても提供されることが望まれる。

児童・生徒に対する福祉教育・学習は、学校教育に限定される活動ではない。家庭や地域社会も含めて、重層的な福祉教育・学習の機会を設けることが必要である。

これらを実施するための新たな展開方法については、政府が掲げる「地域共生社会の実現」に向けた地域づくりや学校教育・社会教育の施策動向などを踏まえたうえで、前回調査の結果を基に本会が策定した「鳥取県における今後の福祉教育の推進体制イメージ」の見直しも視野に、更なる福祉教育・学習の広がりを創出するための指針の策定が待たれる。

福祉教育研究委員会委員名簿

任期：令和元年8月22日～令和2年8月21日

区分	氏名	所属・役職
社会福祉協議会 の役職員	日 野 育 子	大山町社会福祉協議会 ボランティアセンター長
社会教育施設等 機関・団体の役職 員	尾 崎 真理子	鳥取県人権文化センター 次長・上席専任研究員
	○ 石 亀 政 道	社会福祉法人因伯子供学園 理事長
	大 谷 喜 博	鳥取県手をつなぐ育成会 会長
関係行政機関の 職員	嶋 田 武 弘	鳥取県教育委員会事務局 小中学校課 指導主事
	中 井 暁 子	鳥取県教育委員会事務局 特別支援教育課 指導主事
	米 山 純 子	鳥取県教育委員会事務局 高等学校課 指導主事
	田 中 恒 治	鳥取県教育委員会事務局 社会教育課 社会教育主事
	松 井 貴 宏	鳥取県教育委員会事務局 人権教育課 指導主事
	眞 山 将 徳	鳥取県福祉保健部 ささえあい福祉局福祉保健課 地域福祉推進担当係長
学識経験者	東 根 ち よ	鳥取大学 地域学部地域政策学科 講師
	◎ 國 本 真 吾	鳥取短期大学 幼児教育保育学科 教授

◎委員長 ○副委員長

平成30年度実施
福祉に関する意識・実態調査報告書
—小・中学生、高校生、特別支援学校高等部生、
保護者、特別支援学校保護者—

[クロス集計版]

令和2年3月発行

編集・発行／社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会
福祉教育研究委員会

〒689-0201 鳥取市伏野1729-5

電話 0857-59-6344

ファクシミリ 0857-59-6340

